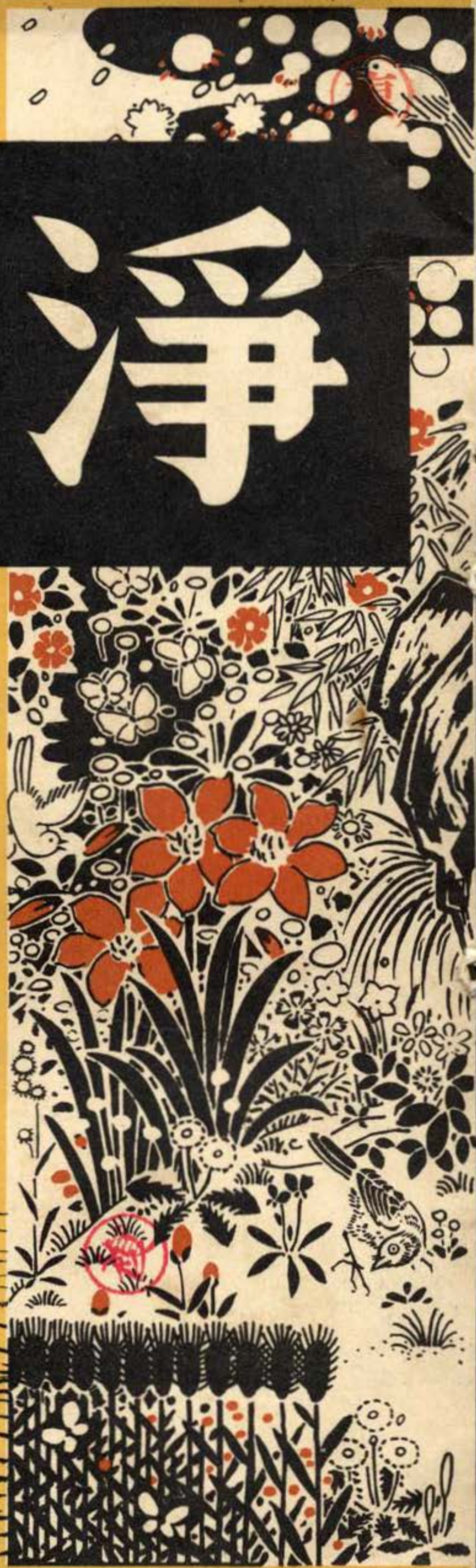


昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年五月廿日印刷本
昭和十年六月一日發行

淨土

六月號



法然上人鑽仰會發行

東山中學校長 江藤 澂英 著

忍 澂 上人

定價 二十錢

(送料二錢)

四六判七十頁
總ふり假名付
表紙二色刷美本

不斷念佛こそは淨土教義の眞髓であり、大乘佛教の精華である。著者はいま範を忍澂上人にとつて、念佛即生活の眞の意味が現代人に對して如何なる重要性をもつかを、諄々として説く。學と念佛との結合の實際を見よ！

別時念佛八誓の製作、訛略念佛の嚴誡、大藏經の對校、その他社會教化・傳導に幾多の功績を遺されて、洛東鹿谷法然院に六十七歳の大往生を遂げられた上人の御一生は、そのひとすぢな求道の歩みに於てまさに元祖法然上人のそれを踏まれたのである。この著は平易に説かれた上人の御傳記であるとともに、まことの信仰生活への好個の手引となるものである。

信仰文庫 第三輯

發行所 増上寺出版部

取次所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園
振替東京八三四五六
電話芝(43)〇四四四・〇四四六

中村 辨 康 著

(四六版百頁以上定價も奉仕的なものにする豫定)

法然上人の信仰生活

近 刊
豫 告

「法然上人の信仰生活」

四十種以上もあると云ふ法然上人の御傳記は、いづれも上人の信仰的な御事蹟と、上人を取巻く信仰厚い人達とを書いてはありますが、信仰生活の順序としての求道の道筋に就ては餘り委しく記述されて居ないやうです。然し私達求道人としては、其求道時代の上人を知りたいのです。またそれと共に信仰に入られてから後の精神界に於ける地位とか影響とか云ふものをも知つて置きたいのです。そして其上小むづかしい理窟をならべたのもいやですし、誰にも分り易く讀まれ、其大體が容易に掴み得られるものが欲しいのです。私の今度書いた小著は無論拙ないものですが、さうした氣持で書いて見ました。然し觀方が求道と云ふ點に重きを置いたのは、却て上人の高く大きい人格を小さくして仕舞つたことと本當に恥かしく思つて居ます。

振替東京芝八二一七八番
電話(43)一五二〇・八四〇番

法然上人鑽仰會

東京市芝公園
明照會館内

發行所



浄土 六月號 目次

・表紙
・不染 鐵二
・青柳 喜兵衛

人間の宗教……………文學博士 矢吹慶輝(二)

女性の
ために
愛の話……………眞野正順(三〇)

體驗を
語る
信仰の味……………理學博士 藤原咲平(一二)

隨想
生命の道……………松浦 一(六)
無駄の徳……………川路柳虹(九)

三來
夜話
陰の人……………増上寺主 大島徹水(一二)

信仰相談……………佐藤良智(四〇)

法然上人をめぐる人々(一)

橋の上の道心……………中村康隆(四二)



かくし念佛……白鳥省吾(一七)
筆隨春 寂……相馬御風(二八)

黒谷源空上人傳

佐藤春夫

(五二)

私の最も尊敬する古今の偉人……(三九)

小笠原長生 鶴見祐輔 石川日出鶴丸
池部 鈞 翁 久 充 川路柳虹
その他

偉人を
語る

輝く少年の魂……前田信次(二五)

読み
の 網代笠さんげ……吉田初太郎(六〇)

一枚起請文講義(二)

中村辨康

(六八)

家庭の衛生……醫學博士 都築 益世(四九)
編輯後記……(七九)

浄土 六月號 (第一卷 第二號)

大正大學教授 大野 法道 著

法然上人

定價 拾五錢

(送料二錢)

四六判七十頁

總ふり假名付

美麗なる繪畫表付

不拔なる信仰への道！それは巨人法然上人が説き且つ行つた道である。そしてこの道こそ現代日本を率ひて立つべき日本精神へと通じてゐるのだ！！

法然上人に關する文獻は古來少しとしなかつたが、いづれも難解に過ぎるか、浩瀚に失するかして、萬人に適する文字を得なかつた恨みがある。篤學の著者が研磨してものしたるこの簡潔にして要を得たる一本は讀者をして直接上人に接するの思ひあらしめ、その嫻々たる餘韻は讀む者を法悦の彼方にひき込まずにはおかない。

法然上人鑽仰會員には、部

數の多少に不拘、一部十錢

發行所

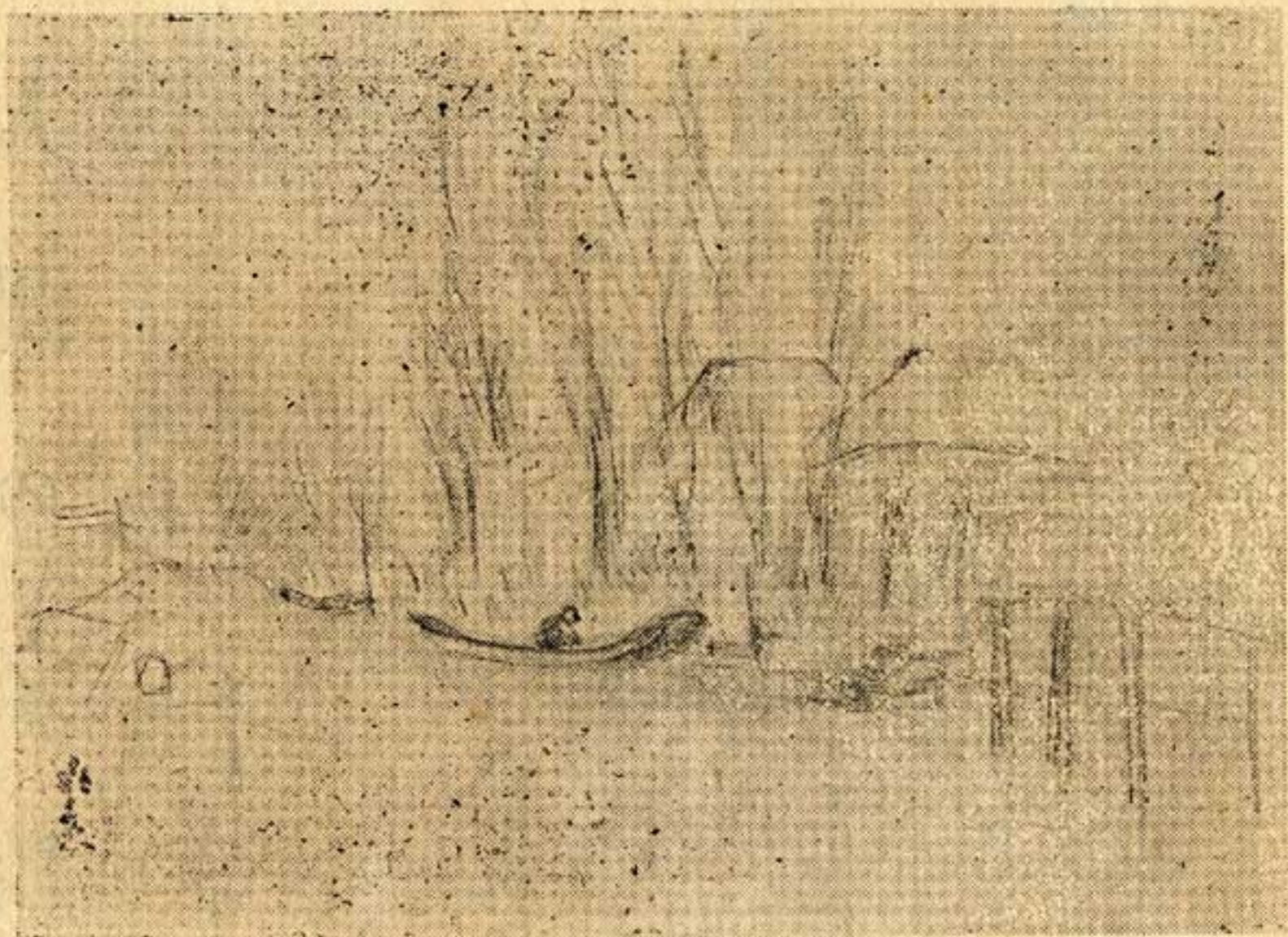
法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
電話芝(43)一三五二・八四〇
振替東京八二一八七番

號 月 六

土

淨



農夫がすきをふむ

念佛をもて田うたとし。

織女がいとをひく

念佛をもてたてぬきとす

鈴をならす驛路には

念佛をとなへて鳥をとり。

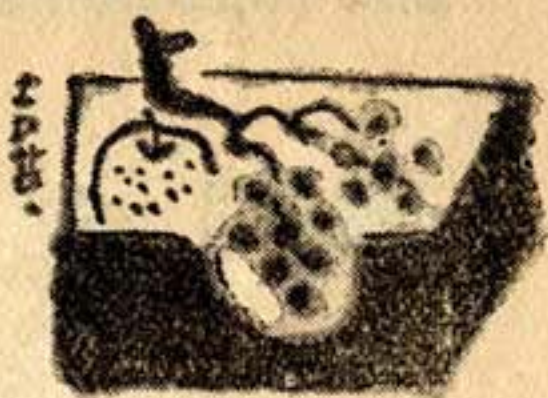
ふなばたをたゞく海上には

念佛を唱へて魚をつる。

(聖 覺)

人間の宗教

文學博士 矢吹慶輝



同じ佛教の中に宗派はいろ／＼に別れてゐるが、例へば金杖を折るが如しで、その一つ一つは皆な佛教たるに異りなく夫々の立場に於て價值がある。またその宗派の祖師は何れも日本の産み出した思想的大産物、誇るべき精神的偉人である。併し今迄の佛教で、寺も建ち佛像もできたが、佛は造つても魂が入らぬ時代に、率先して先づ日本佛教に一つの活きた魂を吹き込む使命を果たされたのが法然上人であつた。大乘相應の此國土に、道場の莊嚴に加ふるに、人の心に鎮國の一大莊嚴を試みられたのが上人であつた。かうして上人によりて日本佛教は正しく赤裸々の人間の宗教となつた。

我は是れ烏帽子も着ざる男なり。十惡の法然房、愚痴の法然房が、念佛して往生せんと云ふなり。

は何といふ大膽な力強い宣言であつたらう。上人は無位無官の一平民僧であつたから、「烏帽子も着ざる男」といはれたのも當然だが、しかしそれは衣紋を繕はざる丸裸の人といふ意味にも解せられる。僧位僧官なき一平民僧が、後白河法皇と後鳥羽上皇との戒師たりしことも特例であつたが、時の主上たる高倉天皇の授戒の師に召されたことは全く破格であつた。表からすれば天台戒脈の正統を傳へた上人が、何で「十惡の法然房」であらう。出でては帝王宰相の師となり、當時「智惠第一」と呼ばれ、上人を攻撃された解脱上人でさへ將又明惠上人でさへ、法然上人に對しては敬意を拂つて居られ、當

時第一流の學者からは揃ひも揃つて推服された法然上人が、何で「愚痴の法然房」であらう。十惡愚痴は法然上人の謙遜の語とされるが、しかし行ひの十惡と心の十惡とすると、誰人も罪人ならざるは無い。愚にも浅い深いがあり、佛になる迄は如何に尊い菩薩でも尙愚痴と名けられる（西方要決）。

それよりも先づ平安末期の過渡時代、世は亂雜、寺は亂離、父子兄弟が血で血を洗ひ、慈悲の法衣が羶血で汚され、塙根にすだく虫の音にすら、救ひを求める叫びが聞かれるやうな時代に、萬づの人の悩みと悶えとを一身に引き受けて、佛法破滅の大賊たる平の重衡も、坂東の荒くれ武者たる熊谷直實も、人々が名を聞いてさへ身ぶるひするやうな強盜の天野四郎や江馬父子も、七人の女房を虐待し盡した變態の阿波の介も、悉くその教團中に救はれるためには、時代の人々ととりて、これ程感激に堪へぬ言葉はなかつたであらう。しかし關白の兼實も、その北の政所も、鎌倉の二位の尼將軍（政子）も、森入道（大江廣元の子）も、頼朝の三男高野山の貞曉も、降つては北條時頼も、公卿と云はず武士といはず、室泊の遊女も鹽飽の住民も、恐らく世を擧げて此の森嚴なる告白に對して、心からなる魂の共鳴を感じずにはゐられなかつたらう。

二

一人で行ひ濟ます一高僧でなく、現實に正しく生きる一高德でなく、萬人と共に眞實に聖く強く生きんがための淨土開宗の苦心と熱心と決心とは、全く國民の心の上に佛教を建て直すこととなつた。かうして支那に往かずとも、日本で新しい佛教が始められるといふ國民的自主的自信を始めてはつきり道破され、それを事實の上に示されたのが上人からであつた。そして誰にでも何時でも何處でも、時處所縁を擇ばずに、尊き儀式が口稱の念佛によりて行はれることを道破せられたのも上人からであつた。

もろこし我朝に、もろ／＼の智者達の沙汰し申さるゝ、觀念の念にもあらず又學文をして、念の心をさととりて、

申す念佛にもあらず。

がそれである。「下るほど人の見あぐる藤の花」。「烏帽子も着ざる男」が、日本での宗教改革の先驅者として、淨土門の元祖と崇められ、日本佛教に起死回生の大業を成し遂げられたことは、幾度繰り返しても盡きざる尊き思出である。佛教は元來、その起源から人間中心の宗教であつた。人間に目覺めた理想運動であつた。風薫る印度恒河のほとり、迦毘羅衛城に孤々の聲をあげた人間釋尊が、修道によつて佛陀となつたのは、人間が神以上の存在たり得ることを事實に示されたものであつた。世界に宗教は様々あるが、人間が神以上の存在たり得ることを説いたのは佛教だけである。しかしそれは悟つた上での佛である。この悟つた上での佛は多分に觀念論によりて論理化され哲學化され、いつしか現實の人間から離れて、全く人間には到達し難い超越の存在となつた。勿論、教理からすれば、誰でもそのまゝ佛であるとしてゐるが、各宗の祖師の中で、信者から後で崇められてゐるのは別として、佛だと公認された方は一人もなかつた。「あるべき筈」と「あらねばならぬ」とは必ずしも「ある」ものではなかつた。

三

いかに誠をいたす輩も、造惡の凡夫の身の己が力にて往生を成就せんほどのことは、いかでか侍るべき。もし智慧をもちて生死をはなるべくば、源空いかでか、かの聖道門をすてゝこの淨土門に赴くべきや。佛教での誠とは何か。理論上の説明では即身成佛であり、本有無作三身であり、六道四生善惡性も佛の姿である。しかし悪いことをするな、善いことをせよとは三つ兒も知つてゐるが、六十の老翁にもその通りには出来ない。原理の究明は勿論大切だが、いつの時代にその眞の誠が現世に完全に實現されたか。人の世には永遠の昔から、果して眞善美が全一體として實現された時代があつたか。日本に佛教が渡來してから、當時八百餘年になつたが、「あるべき筈」の淨き世界がいかに實現されたか。だから悪いのが當り前だと云ふのは善くないが、人間の力の微弱を現前に見せつけられて、如來他

力の不思議の本願を叫ぶのは嘗に上人の當時ばかりではなかつた。過ぐる歐洲大戰に、英佛の到る處の教會が熱心なる参詣者で充たされたことを追懷する時、強いのも人間だが併し又弱いものそれも人間である。

學生骨になりて念佛や失はんすらん

學んだ學問が邪魔になりて、愚痴の念佛の眞髓を失つてはならぬ。即ち信仰の世界は自分の學問や地位や名譽や富や權力などの、表舞臺で人間に加へられた鑄金のすべてを取り去つた、信外輕毛の凡夫、樂屋での人間、丸裸の姿で來なくてはならぬとの教訓は、今も何時も、世世に褪せざるあざやかさを以て、犇々と幾百萬の目覺めた魂を衝くであらう。

四

かうして

とてもかくても此の身には、思ひわづらふことぞなきと思ひぬれば、生死ともにわづらひなし。

天に仰ぎ地に伏して悦ぶべし、このたび彌陀の本願にあふことを

悦び勇んで人生の行路を堅實に踏みしめられた上人の芳躅には、到る處、「光明遍照十方世界」が面り展開した。

無邊光佛

みほとけの光にもれじ四方の海の
はてしら波の底のもくづも

行 誠 上 人 —

生命の道



松 浦

一

法然上人のお弟子西仙房心寂といふ人のことに就いて勅修法然上人御傳にかういふことが書いてあります。

西仙房心寂はもと觀空上人のお弟子であつたところが、後には法然上人を師として念佛三昧の行者となつた。學問もした人ではあるし、道心の深い人でもあつたので、上人も大事に思召て居られた。

ところがこの人、どうも仲間の人々や親しい人達の中にあつては何かにつけて煩ひが多い、誰れも知る者のない處に獨りゐて靜かに念佛をしよう、と思つて、何處か適當な所はないものかと尋ね歩いて見たところが、河内國讃良といふ處に、そのあたりも賑はつて見える家があつた。其處の人に尋ねて見ると、その家主は在家のまゝ剃髪して佛道に入つた女（尼入道）であつて、そのあたりでの長者であ

り、有難い善人で、澤山の色々な僧が集る處であるといふ。それを聞いて西仙房はその家へ行つて言ふことには、私は靜かな處にゐて後世の爲のおつとめを致したいと思ふのですが、緣者も何もないう者でして、命をつないで行くことも出来ませぬ。あなたは善人でおいでゝあれば、あの林の中に方丈の庵を一つお造り下さつて、どのやうなものでも食物をいたゞかしては下さいますか。その内に籠つてゐて靜かに念佛を申して居りませう。但僧に歸依して置いたからといふお考へで、心經一卷をもお讀ませになつたり、又は手紙一通なりとも書けなどと仰せになつて、これへお呼びになつたり、あれへおいでになつたりするやうなことがあつてはなりません。少しばかり命をつないで下さいますものを、山林の鳥獸にでも施すと思



住吉風景 安藤不二人

召して下さいませ。かう言ふと、主の女も聊か見どころもあつたものか、いかにも御房の仰せに従ひませう、決して心をたがへませぬ。と答へたので、それならばその頃に参りませう、と約束して、京へ歸り、所持のお經などを皆人にわかち與へ、唯佛様にお水を供へる水瓶だけを携へて、上人の草庵に参り、隱居の所存を述べて、この世でお目にかゝるは只今ばかり、再會はいづれ極樂で、と言ひ

すてゝ出て行つてしまつた。上人はこの房がどのやうにして暮してゐるか、と仰有つて居られたところろが、三年たつとまた歸つて來た。上人驚いてどうし

たことかと仰せられると、西仙房の言ふことには、されば初めの年ばかりは俗縁俗念に心の亂されることもなくてよろしう御座いました。が、去年の春から物淋しい心が起つて來まして、厭うた仲間の人々や親しい間柄の人達までも戀しくなり、わびしさに堪へ難くなつて來ましては、前に持つて居りましたお經でも開いて見ましたらば慰められませうにと、人に與へてしまひましたことさへ後悔致し、剩果ては午前のお齋、午後の食事を傳へに参りました小さい子供などに向ひまして何といふこともない冗談などを申して心を慰めなどして居りますと、物淋しい心持は愈募つて來るばかりでありましたので、故郷を思ふ心は多く、極樂を願ふ心は少いやうになりました。心を鎮めて念佛を申さう爲にこそ此處に來たのでありませんでした。物淋しさをこらへ、故郷を戀しく思ふ心と戦はう爲ではありませんでした。して見れば、世間を離れた寺住ひと言つて見ても名目ばかり。かうしていつまで住んでゐても、終りにはどういふことになつてしまふのでありませう。無益の住ひかなと思ひまして、主には斯くとも申さずに逃げ上つて参りました。これを聞かれて上人は、智者であつても學問をした者でも、道心のない者には、この心は起らない、と大變にお喜びになつた。

「上人返々隨喜し給けり」——西仙房の話は此處ではこれで止めて置きます。故郷戀し人戀しの心に引かれ、安き心で念佛する爲、

京へ歸り上つて來たこのお弟子に會ひ、その言葉を聞かれた時の上人は、「智者にも學生にもよらず、道心なきものは、この心はなき事なりと、上人返々隨喜し給けり」のお喜びでありました。これが常人でありましたらば、「やつぱり駄目であつたのう」と笑ひながら歡び迎へる位のものでありましたらう。上人は隨喜し給うたとまであるのです。同じ御傳に上人がお弟子の禪勝房の問にお答へになつたものゝ中にかういふことがあります。

現世をすぐべきやうは、念佛の申されんかたによりてすぐべし。念佛のさはりになりぬべからん事をばいとひすつべし。一所にて申されずば、修行（廻國巡禮など）して申べし。修行し

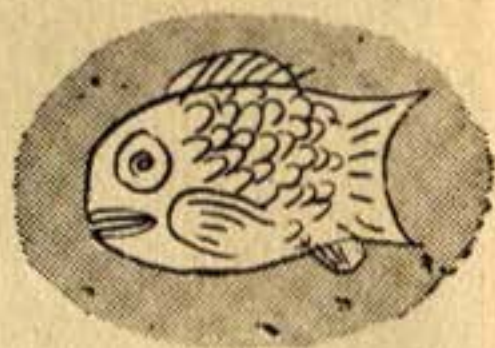


夫二不藤安 樹 立

て申されずば、一所に住して申べし。ひじりて（出家して）申されずば、在家になりて申べし。在家にて申されずば、遁世して申べし。ひとりこもり居て申されずば、同行と共行して申べし。共行して申されずば、一人こもり居て申べし。衣食かなはずして申されずば、他人にたすけられて申べし。他人のたすけにて申されずば、自力にして申べし。妻子も從類も、自身たすけられて、念佛申さんためなり。念佛のさはりになるべくば、ゆめ／＼もつべからず。所知所領も、念佛の助業ならば大切なり、妨にならばもつべからず。總じてこれをいはゞ、自身安穩にして、念佛往生をとげんがためには、なに事もみな念佛の助業なり。

念佛とは言はゞ絶対不滅の生命の道を穿ち進む人間の歩みです。

これはこの世を旅する者の凡てが行くべき道なのです。これはこの道を行く者の凡てが取るべき歩みです。法然上人はそれ故にこれを吾々の生活の唯一の意味として示されたのでありました。これは天地の大道です。これは天地の大道の自然のまゝの歩みです。念佛の人西仙房は我意我慢の跡もなく、念佛の自然の心を心として、風に吹かれて散る花のそのわだかまりなき心の姿で、鳥の如くに庵から逃れ古巣の方へ歸りました。念佛の道は自然の心の素直さで穿ち行くべき生命の道です。



無駄の徳

川路 柳 虹

無駄といふことはいけないことだ。無駄は要らぬもの、餘けいなものだ。「無駄なく」ものごとをするのはよいこと、無駄づかひ、無駄話、無駄書、——みなほめたことでもないやうだが、さりとて完全に「無駄がない」ことが果して出来るか。また少しも無駄のないことが最も立派なことであるか。

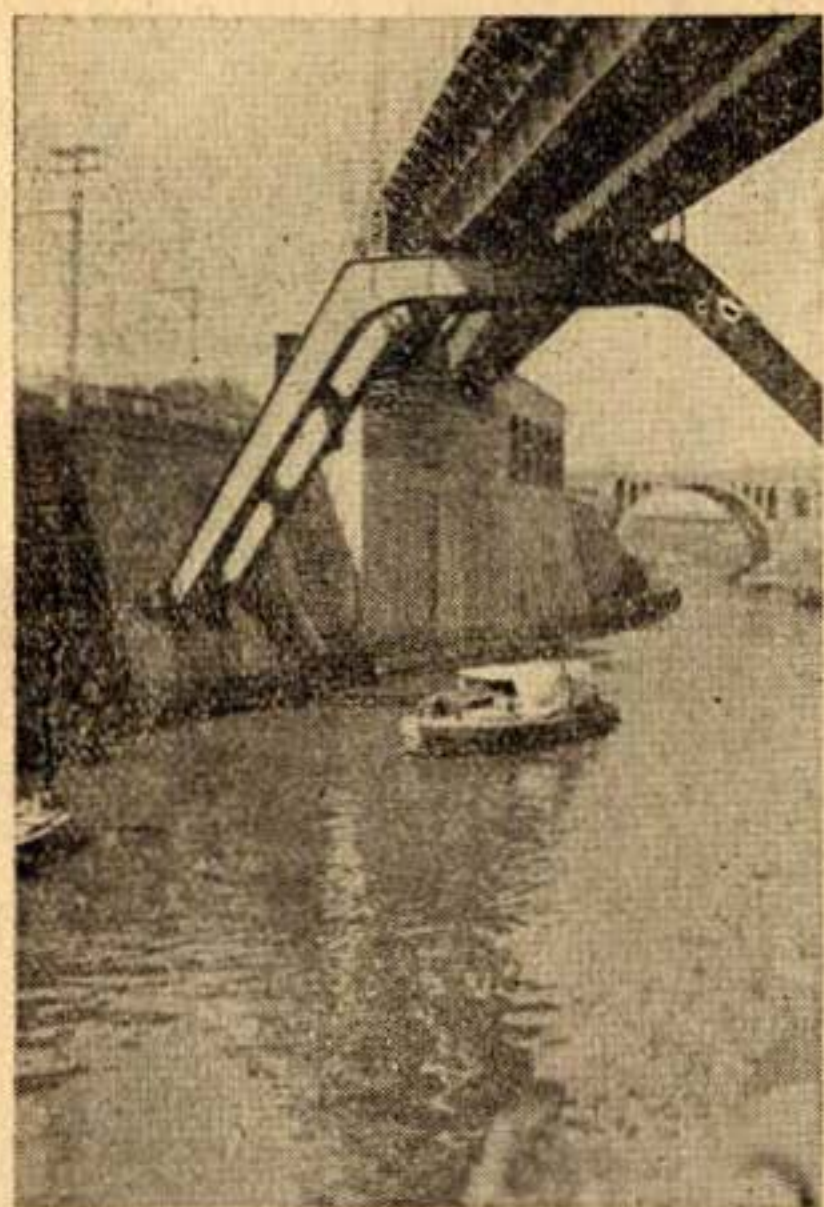
要るものだけには立派な存在の價值がある。要らぬもの餘計なもの、あつてもなくてもいいのだから無きに如かず、いな無駄があつては有害になること又屢々である。が、そのことをはつきりさすためには無駄の定義をもつとはつきりさせておかねばならない。無駄とは役に立たぬといふもの、謂だが、では役に立つとはいかなることか。それから決めてかゝらぬと無駄の範圍もはつきりしない。役に立つといふことは目的を完全に果すことである。人間でも役に立つ人間と役に立たぬ人間がある。役に立つ人間といふのはその一定の目的に對して完全にその目的を果す者の謂である。主人の命

令をよくきいて、その通り働く小僧は主人の目的を果してゐる役に立つ存在だ。商人が金儲けをするのになるだけ細心に氣を配り、一錢一厘の無駄もしないやうにすることは金儲けといふ目的に合致する「役に立つ」方法の一つだ。これらに反するものは一切「無駄」だ。

が、かういふのはつまりその目的が一つの巧利にあるから巧利的でない方法手段一切は無駄だといふことになる。だが、さういふ巧利だけの目的から言つても時に無駄に見えることがその實無駄でない場合も屢々ある。所謂「捨石」といふことである。或る種の目的に對してする意識的な犠牲である。無駄である。商人の廣告宣傳に金をかけるのも、それが有効な消費だと思へばこそ、あとからの利益を豫想すればこそ盛んに金を撒く、代議士が逢ひたくない人間にも逢つてお愛相をいふ——他日の選舉に一票をといふ慾からだ。——こんな無駄は眼前の無駄ながら功利を目あてのことなのだから眞實

には無駄とは云へない。それは一つの政策の一種と言へよう。そんな功利を絶した自然の無駄の偉力とでもいふものに該當しうな一挿話を記してみよう。

僕の知人の家にMといふ片輪の少年がゐた。小さい時兄守の過ちで高いところから落ちたのがもとで足を挫いて跛足になつた。その跛足もとても杖をつく位のことで合はない跛足なのでいつも家人の世話になつてゐた。そればかりでない腦のどこかも打撲したのがもとで少し精神もへんであつた。が家が相當有福だつたので、家人もあきらめてこの子供を一人の癡人と思ひなして育てた。つまりMは一つの『無駄』として扱はれたのである。彼には一人の妹がゐた。がこの妹は兄の不具をいたはるといふ風もなく甚だ我儘で



秀全 原福……水 疏

あつたが家人はこの妹の方を愛してゐた。Mは小學校へもゆけないうで家庭教師を雇つてそれに學業を見て貰つてゐた。數學など甚だ覚えがわるかつたが讀み書きはよく出來た。このMが或る日ふとしたことから靈感をえた。そして自分の手が自然に慄えてきて、跛足の足のところへゆくのである。その儘にしてゐるとその悪い足が何だか軽くなるやうな氣がする。Mはこの行爲を無意識に繰り返してゐる中に段々足がよくなつてくる氣がした。彼の十六歳の時である。彼はこれは神が自分を助けてくれたのだと自認した。そしてたゞわけ分らず合掌した。その信仰の對象は所謂神道の神でもなく佛敎の佛でもない。たゞ「一つの神」であつた。絶對であつたのだ。彼は自然な靈感でさういふ一つの信仰をうるやうになつた。と共に益々彼の靈感が發達して靈媒のやうな動作をしたり、或は人に施療したりしするようになった。一家の人はこれを意外なことに驚いて、その道の大家である精神療法の權威S氏にこの事を告げた、S氏は興味をもつて彼に逢つた。そして自己の信じてゐる道を大に説いた。彼は理窟はよくわからなかつたがS氏の説をきいて愈々自信を強くしてS氏に弟子入りした。それから彼は純然たる超人的存在となつた。彼は施療するにしても決して金をとらなかつた。彼には全然物慾がなかつた。それは衣食には困らなかつたからでもある。が又こゝに一家に一大事が起きて或る事情からMの家は破産せ

ねばならぬ破目に陥つた。彼の十九の時である。然しさうなつても彼は施療によつて金をとる事など考へなかつた。が彼の療治をうけて治つたものは彼の一家の不幸を傳へきいて應分の喜捨をすると申したものは何百とあつた。そして夫れが實行された。

Mの母はこの時何と言つていゝかわからない感激に打たれた。父は退職軍人であつて宗教などには無關心だつたが母は淨土宗の信徒だつたのでこれもみな阿彌陀さまのお蔭だと云つて愈々信仰生活に深く入つて行つたが、癡人だつたMは人並に杖なくても歩けるやうになつてから大に馬力をかけて精神療法による施療や豫言のやうな事迄やつて多くの人を聚めるやうになつた。

惜しいかな彼は二十二で死んだが——そしてその一家も今は小さ

バスの中で

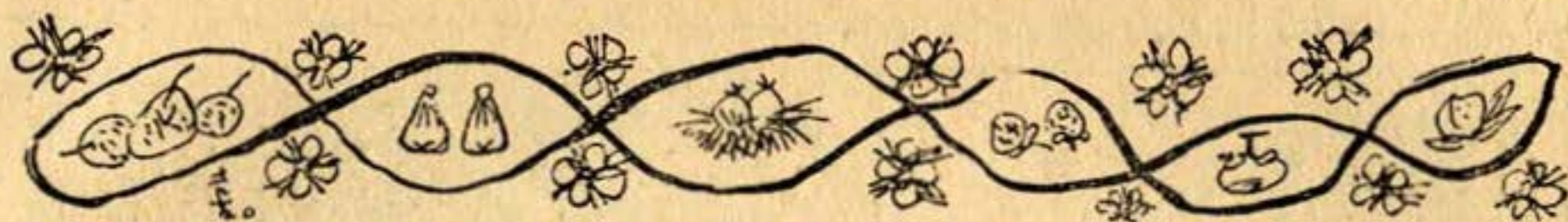
母親の手にはデパートの買物包みが一ぱいだつた。女の子は母にのせてもらふつもりで車とは反対の方を向き、母の袖を引張つた。車からは女車掌が降りて來た。そして後から抱へるやうに車内へはこんだ。女親は軽く禮を云つて一番後の席にかけた。子供は直ぐ座席につて窓から後へくと通り過ぎて行く市中を樂しげに見てゐた。

子供にとつては至る所がわが家の明るさであつた。側から靴の汚れで他の客に迷惑のかゝらぬやうに母は一人氣をつかつてゐた。恐らく貧しい月末の、又親子にとつて楽しい買物の歸り途であらう。やがて目的地に着くと慌てゝ席を立ち、よろけながら後を追つた。降り際に子供は自分で踏み段に足をかけ、横を向くと大きな聲で、「サヨナラ、サヨナラ」と女車掌に手を振つた。

自然に出た小さい心の贈物にとつた女車掌はめんくらつた。車は走り出した。俄かに氣付いて女車掌は首だけ車から出すと、小さい姿に手をふり心からの挨拶をかへしてゐた。側の乗客は美しい風景だと思つた。それから彼女は黙りがちになり、やゝともすれば信號を忘れたりして、何かに氣をとられてゐる様子であつた。彼女の家に一人の子が残されてゐるに違ひない。

(浦田)

な商賣をやつて地道に暮してゐるが——それにしてもこの「人間の無駄」が決して無駄でなかつたこと、あへて「ミダの徳」といふわけでもなからうが、ムダの徳たることは證據立てられたやうである。自然に一つの攝理があるとすれば眼前の無駄は決して本來の無駄でない意味も解されるやうである。「自然」に見よ、大自然は人間などの計り知れない無駄をしてゐる。人間の生産に對しては人間自身が制限をさへ加へてゐる。だが大自然は何らの制限もなく繁殖し、又死滅もする。それでゐて自然は昔からありの儘である。大きい調和である。無駄といふことも自然の如く大觀して考へるなら眼前の功利など物の數でもないわけだ。



信 仰 の 味

中央氣象臺
理學博士

藤 原 咲 平

私のやうなおよそ宗教とは縁遠い自然科学畑に育つた者が、佛教について兎や角云はうとは考へて居りません。私は科學の研究に従ふもので、他を教へるとか教化しやうとかの考へは微塵も持つて居りません。むしろ教化され度いと思つて居ります。それで今迄も此様なことを餘り話したり筆にしたりした事は有りませんでした。折角皆様の御來訪ではあり、高瀬さんからの御依頼もありますからほんのつまらない體驗を申し上げます。

勿論、私は佛敎學に對してはいまもづぶの素人である。また誰か師について教へを乞うたと云

ふ經驗もない。長野縣上諏訪の郷里の家が淨土宗正願寺の檀徒である關係上、幼時からお經と云へば淨土宗のそれのみが耳馴れてゐたぐらゐのもので、格別家庭的に宗教的薰育を施されたといふわけでもないのである。

それが丁度大學三年の時の夏、暑中休暇いつぱいを利用して、勉強をしなければならなかつた。郷里に歸省はしたが、自家で一室に籠つて讀書をしてゐると、農耕で忙しいのに自分だけが怠けてゐるやうで困つた揚句、地藏寺といふ禪寺の一室を借りることにした。そこで私は一人氣儘に勉強をつづけて居た。

ところが或日、私は勉強にも倦きたので晝寢でもはじめようかと考へて閑靜な本堂に行つたが、ふと經机のうへの

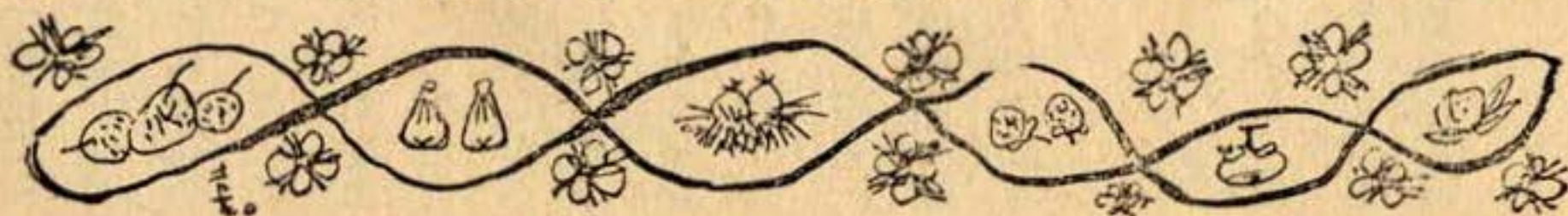


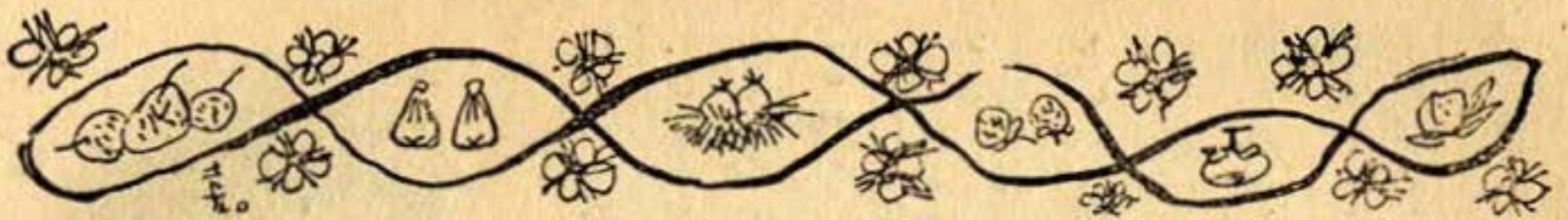
經文を手にとつてみる
と、「般若心經」と云ふ
のであつた。それまで
一度も經文などを手に
したことはなかつた
が、此御經の最初の、
「五蘊皆空なりと照見
して一切の苦厄を度す」の一行に、非常に興味を感じた。此
一句は物理學的に考へても明に眞理である。五蘊皆空と照
見が出来たとしたら、必一切の苦厄は度し得るに相違な
い。只凡夫の吾々は其照見が充分には仲々有り得ない丈であ
る。併し私の感じたことは、「觀自在菩薩でない我々でも、
修養すれば必ずその修養に應じただけの照見をうるだらう」
といふ自信であつた。私にはもちろん此時經文の眞正の理
解は出来ない。しかし自分の眼がそれによつて少しづつでも
開かれて行けるなら何といふ幸せなことであらうといふ充足
感を覺えた。又別に「無知亦無得」の一句に吸ひつけられ
た。私はそれからその「般若心經」を何回も繰返し讀んだ
が、面白くなつたので何日もかゝつて次には側に置かれてあ

つた「般若理趣文」と云ふのをも讀んで見た。そ
のお經で私がいちばん感じさせられたのは、「人
間の本性は清淨である」といふことであつた。
かうして佛書に興味を持つ機會を與へられたの
であつた。もつとも自分の研究の餘暇にぼつぼつ
讀んでゆくだけで、初めは經文の註釋書のやうな
ものは讀んで見たこともなく、萬事自己流の解釋
に終始してゐたのである。是は却つて舊來の執は
れた型にはまつた解釋から脱却し得る爲に有効
で有つた。後には諸種の註釋も讀んで見た。それ
で佛敎に對して著しく「なじみ」を感じた。

私は「觀音經」を洋行中にもポケットから離さ
ず船に乗つても飛行機に乗つても觀音様に任せ切
つて、それで心配はなかつた。勿論「波浪不能沒」
の文字通り信するのではない。只そんなことに氣
を使はない丈の御利益は充分にあつた。

宗教は理論ではないといふ。私もさう思ふ。
しかし信仰生活といふも理が通じて信仰は一段と





ゆるぎのないものになる。

私は自己流の解釋によつてゐたのであるが、それでも佛教と物理學との間に非常に一致する處があるのを見て面白いと思つた。例へば「般若心經」の「無明なく亦無明の盡ること無く、乃至老死無く、亦老死の盡ること無し」に就いて初め自己流にかう考へた。「無明」とは「分つてゐない」ことである。しかし現在分つてゐないことは其中には分つて来る。さう云ふ風にして段々物ごととは解つて来るものである。即ち無々明であるが、併し其時には更にまた新しい疑問が起つて来るので、すつかり解り切つて仕舞ふと云ふことは有り得ない。即ち無々明盡である、と。併し後に註解を讀んで、無明とは輪廻中の一齣である事を知つた。

また私の大學卒業前後には物理學界で第一法則即ちエネルギーの實在法則、物質不滅の法則などがやかましく云はれてゐたが、これは大乘起信論でいふ眞如門と同じである。しかしエネルギーも物質も不滅ではあるが、絶えず變化し流れる、

これは第二法則である。而して一切が平等に向つて變化する事を教へる。これが生滅門の中の滅に當る。瀧の例をとつて見よう。瀧から水力電氣を得る其瀧は、高さが高ければ高いほど用度が大である。低ければ低いほど用度が小である。だから高低の差別が少なければ少いほど用度が減じる。しかしこの差別によつてエネルギーの活動（生）が生じるのであるが、エネルギーは常に其本性として高いものから低いものへ移る傾向がある。即ち水が山から落ちる傾向はあるが、瀧を下から上る傾向はない。かくて結局平等（滅）にならうと絶えずはたらいてゐる。すつかり平になれば活動なく、死の世界である。寂滅である。即ち法華經に「諸法從本來寂滅相」とあるのは物理の第一法則と一致する。四句の偈に「寂滅爲樂」とあるが、寂滅即ち自然の法則に従ふを以て樂となせば凝滞もなく、苦も亦ない譯である。

また觀無量壽經の中に「身の諸々の毛孔より光明を演べ出すこと須彌山の如し、彼の佛の圓光は百億三千大千世界の如し、圓光の中に百萬億那由他恒河沙の化佛有り、一一の化佛に亦た無數の化菩薩ありて侍者とせり」云々

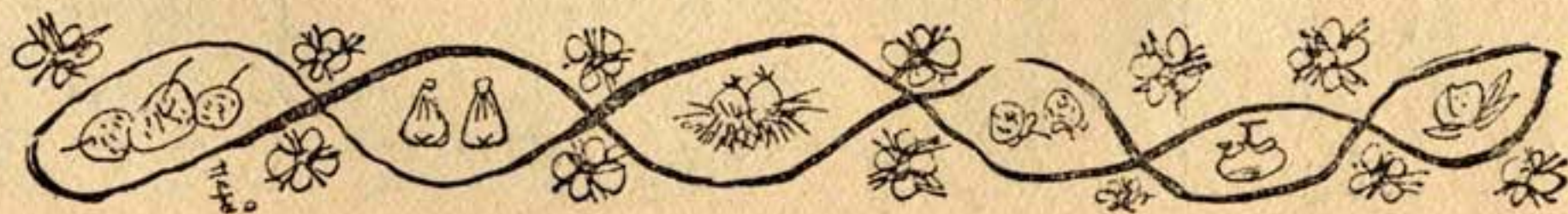
或はまた「芥子藏須彌」なども華嚴經に有つたと思ふがこれは一見奇怪なことのやうにも思はれるが、現在の物理學でも、物質の原子は核及幾多の電子から構成されてゐるが、その構成は丁度太陽系と似たやうなものであると考へられる。さうすればまたこの小地球である電子の上に人間のやうに社會を營んでゐるものがあるかも知れぬと云ふ推測も可能であつて、明に一微塵に三千大千世界を藏する事が理解され、右の經文の字句が決して奇怪ものでなく、寧ろ進歩した物理學上の研究の成果と一致する點を見出し得る譯である。

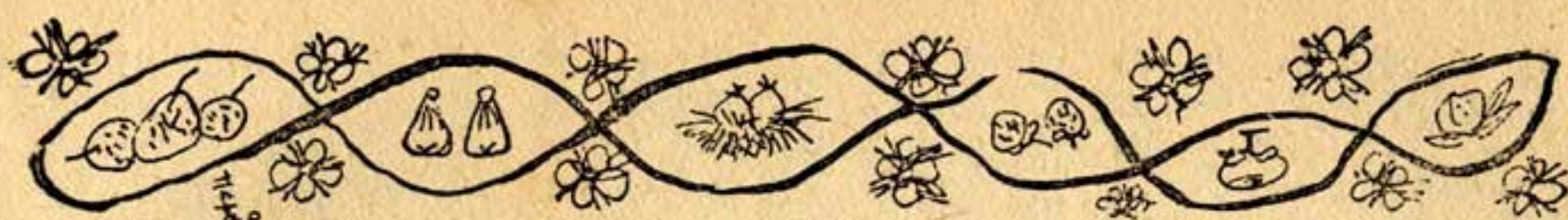
生の法則は物理學ではまだよく分つてゐないが、生には種子が要る、また或程度まで生長増上するが絶對的の生といふものはない。かうした點では佛教も同じやうに云つてゐる。私は時折り「觀音經」を口誦してゐるが、あの偈文の終りの方の、「觀世音淨聖、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙となり」といふ句に惹かれる。依怙、えこひいきとは生死の原理から云へば生の原理である。一般の人にはえこひいきと云ふ言葉は誤解され易いと思ふが、それはものを中心に積み上げる力、物理學で云ふ重力、人間社會で云へば愛がこれに當るだらう。煩惱といふのも無明と云ふのも生の意を指す。その

力を崩すのが死であり涅槃である。えこひいきは度がすぎればわるいに違ひないが、家庭をつくるのも、社會集團の成立も、依怙をはなれては成り立ち得ないと思ふ。

とかう云ふ風に佛教と自分の専門の學問との間の色々な結び付きを見出して、佛教に興味を持つやうな機縁を作つた。つまり此様にして佛教に親しみを得た。

十年前に父が逝つた時から、私は母とともに日課念佛を勤めるやうになつた。それで淨土宗とも近づきになつた。小供の時とちがつて細かく味はふ事が出来た。四年前中耳炎を患つて生死の境を彷徨しなければならなかつたときのことである。覺悟をきめて既に遺言狀も書いて仕舞つた。それで心の和らぎを求めたのであるが日頃愛誦してゐた「觀音經」も今のこの生死の場合には用をなさない。やつぱり淨土宗の發願文が一番心易いものであつた。





そこで阿彌陀様の像を部屋にかけたいと思つて方々探して貰つたが、大きいのはいくらもあるが、病院の壁にかけるとやうな手ごろな像がなかなか見付からない。それでも伯父が骨を折つて何處かでペルシヤから來た阿彌陀様の尊像を見付けて來て呉れたので、繪の具も剥げ落ちた随分古いお像であつたが病室の壁にかけて、お線香をあげたりして看護婦などの厭がるのもかまはずに、お念佛を申したり、發願文を讀んだりして居つた。發願文の「願くは弟子等、命終の時に臨んで、心顛倒せず、心錯亂せず、心失念せず、身心に諸の苦痛なく、身心快樂にして、禪定に入るが如く、聖衆現前したまひ、佛の本願に乗じて、阿彌陀佛國に、上品往生せしめたまへ……」これが一番心を爽かにし、愉しくした。生とか死とか云ふ事はもう念頭を去つて仕舞つた。肉體の苦痛は感ずるが、感じて之は痛であつて苦ではなくなつた。それこそ本當に至心に阿彌陀佛に歸命したてまつた。

かうして私は割合樂な氣分で居つたが、その中母が上京して來た。私は老いた母の顔を見て、この人を獨り残して死ぬのは氣の毒だと思つて、生きてやれとも思ふ様になつた。偶然の機會で病院を代へてから、私の病氣はぐんぐん良くなつて行つた。

私の病氣は此様にして癒つた。恰かも死を恐れざるものから死が逃避したかの様であつた。

癒つてからは相變らずまた觀音經を誦して居るが、併し觀音様が阿彌陀様の脇立である意味はよく呑み込みました。一枚起請文の御氣持も少しは解る様に思ひます。

右は誠につまらない私の體驗で申し上げる程のものでもありませんが御需めにより、是も何かの縁と思つて申し上げます。次第であります。(昭和十年五月)

怪 談

恐怖性に襲はれた夫『おい、此の部屋には幽霊があるぞ！お前には見えないか？』
部屋に入つて來た夫人『えゝ、見えますわ、けれど貴君は何處にゐらつしやるの？』



隱 し 念 佛

白 鳥 省 吾

私の眼に浮ぶ郷土風景のうちで、鮮かな一つの思ひ出がある。

私の生れた處は、今の宮城縣栗原郡築館町。昔の奥羽街道の一驛であつて、私の小學校生時代はまだ村として呼ばれる寂しい部落だつた。

明治九年の明治天皇の御巡幸記には「人面醜陋、始めて奥羽の邊境に入るを覺ゆ。」とこの部落のことを記してあるが、物珍らしげに當時、集ひ寄つた村童、村民の風體は、都馴れた人達には相當醜汚の感を興へたかも知れぬが、特にこの部落に於て、かりした感じが始まつたとも思はれない。關東、東北かけての他の部落とその大差はないところだ。

このあたりは、昔時、先住民族と大和民族との闘争の可なり激し

かつた處らしく、原始民族の住むに適した大小の幾つかの沼が一里ほどの處にあり、今でも石斧、矢の根石をその附近で發見出来るし、伊豆城のあとを思はせる伊豆の原は私の町の一部であり、町の南方かけて約一里の間は、丘陵がまるで萬里の長城のやうな自然の城砦形に續いて居るのである。

そして殊にその始端である丘は、てうど私の町の南方にあり、その一部には人皇四十六代孝謙天皇の頃に創造せられた名利、醫王山雙林寺がある。もと醫道山興福寺と號し比叡山に屬し、四十八坊あつたといふ。そしてその本尊杉藥師如來は傳教大師の作で持國天王、增長天王（運慶作）と共に國寶として指定されてゐる。それを見ても古くから文化の芽生へがあつたのだ。

伊達忠宗の時代、承應三年に、曹洞宗に屬し、醫王山雙林寺と稱した。

その丘の始端の最も東方に、私の家の畑地約一千坪あつて、その隣りに、白鳥家一門の墓地があつた。

そこで詳しく言ふと、東から西に續いて白鳥家の墓地、八幡神社の森、切り下げた國道、雙林寺の杉森といふ順序に、並んでゐるのである。

私の町では、この雙林寺を上寺と呼び、主に町の南方の住民が檀家であり、町の北方の住民は下寺と呼ぶ通大寺の檀家であり、いづれも寺には所屬する墓地があり、共に曹洞宗なのである。

私の家では何故、これらの寺に墓域を有せずそこに葬らうとしなかつたであらうか。

それには一つの大きい理由があつた。

念佛宗の信者であつたからである。

二

白鳥家の墓地は南と東に眺望開け、眼下に田畑と幾つかの丘陵の果てに、古い鏡を投げたやうな沼を望んでゐる。

白鳥家は本家と別家と合計三家のものの墓石約五十、墓石とも思へぬ扁平な大きい石に「青山松處」と刻んだのもある。

そして數百年の老松が傘のやうにそれらの上を掩ひ、古い紅椿の樹が女性的に寄り添ふごとく赤い花を無數につけるのである。

私の家の畑とこの墓地が、明治三十六年頃、小學校の敷地として

指定され墓地が改葬されることになつた。

そしてそれらの塋域は、無慘にも掘り返され、其處からは無數の白骨が出たり、古いのはたゞ黒土と溶け去つたやうな部分となつてゐた。それらは何の奇も無かつたが、墓地の隅の小高いたゞ一つの塚が掘り崩された時に、其處から荷馬車に約三臺ほどの子供の拳ほどの同一大の小石が何萬となく出て、それに一石一字と經文の文字が墨書されてゐたのである。

地ならしの人足達は、普通の土と異つてこの小石を棄てることの重さに閉口してゐた。私も、そのうちの、特に字の鮮明なものなものの五六十拾ひ取つて來たが、それとても、いつとはなく失つてしまつた。

父の言ふ處によると、塚の中には更に五輪の塔が埋まつてゐると言ひ傳へてあると言つてゐたが、必要以上に人は掘らうともしないし、父も命令しなかつた。

これらの小石の上の寫經は何のために成されたであらうか。徳川の末期にこの部落に來た或る有徳の念佛宣敎の尼の菩提を弔ふためであつたともいふ。

宣敎のためにこの東北の僻地に來た尼は、この僻地に信仰の旅を終つたのであつた。

そして、この部落の熱烈な信者達は、相寄つて、その死を悼み、白鳥家の墓地の一隅に厚く葬つたといふことになる。

何故、念佛宗はこの土地に於て禁じられたのであらうか。私は此の佛教の興亡史をよく知らないが、この邊を支配した伊達藩の偏見か、或は感情上の問題でしかないと思ふ。この部落に於て今もなほ「隠し念佛」の名で呼ばれ、秘密な宗教として取扱はれて居り、基督教の一種の洗禮に類するものが、この「隠し念佛」の先生？によつて行はれ、私の兄も親戚の者もその記憶があるといふ。

念佛が禁じられたといふ理由には、藩主伊達が、その滅ぼした藩主の宗派であつたからであらうか。國家的に幣害として禁じられたものとは考へられない。

徳川の末期に私の先祖は、馬に乗つて代官所か何處か、その筋の處に、念佛の正しい佛教であることを主張に行つたそうである。そして歸途、部落の入り口の松並木、俗にいふ太鼓坂に於て、落馬略血して死んだといふ説がある。毒殺せられたものと考へることも出来る。

三

白鳥家は必らずしも、この村に於て、念佛宗の宗家ではなかつたらう。

だが、白鳥姓は草わけといふほどでなくとも、最も舊家であり、白鳥姓を名乗る家は現在五百戸のうち五十戸もある多數だ。

この白鳥といふ姓は私の町だけであつて、他の地方にはそう多くない。

隣縣の山形には白鳥城趾があり、白鳥村がある。それは最上義光と對抗して、勢力を振つたものであつて、最上義光は兩雄並び立たずといふことを考へて、その嫡男の白鳥の一族のうち最も強剛な橋間勘十郎武任の息女を娶り、親族となつて武任を招き寄り、武任を打取り、漸次、白鳥の一族を滅ぼしたといふことが、「義光物語」にも見えてゐる。

その頃の最上義光の城趾は今の山形市の聯隊所在地であり、武任の首洗井戸なるものが、現存してゐる。

白鳥の姓は又、藤原三代の榮華をうたはれた平泉にもあつて、源義經の最後を語る高館から望み見られる所に、白鳥二郎泰家の館趾といふものがある。

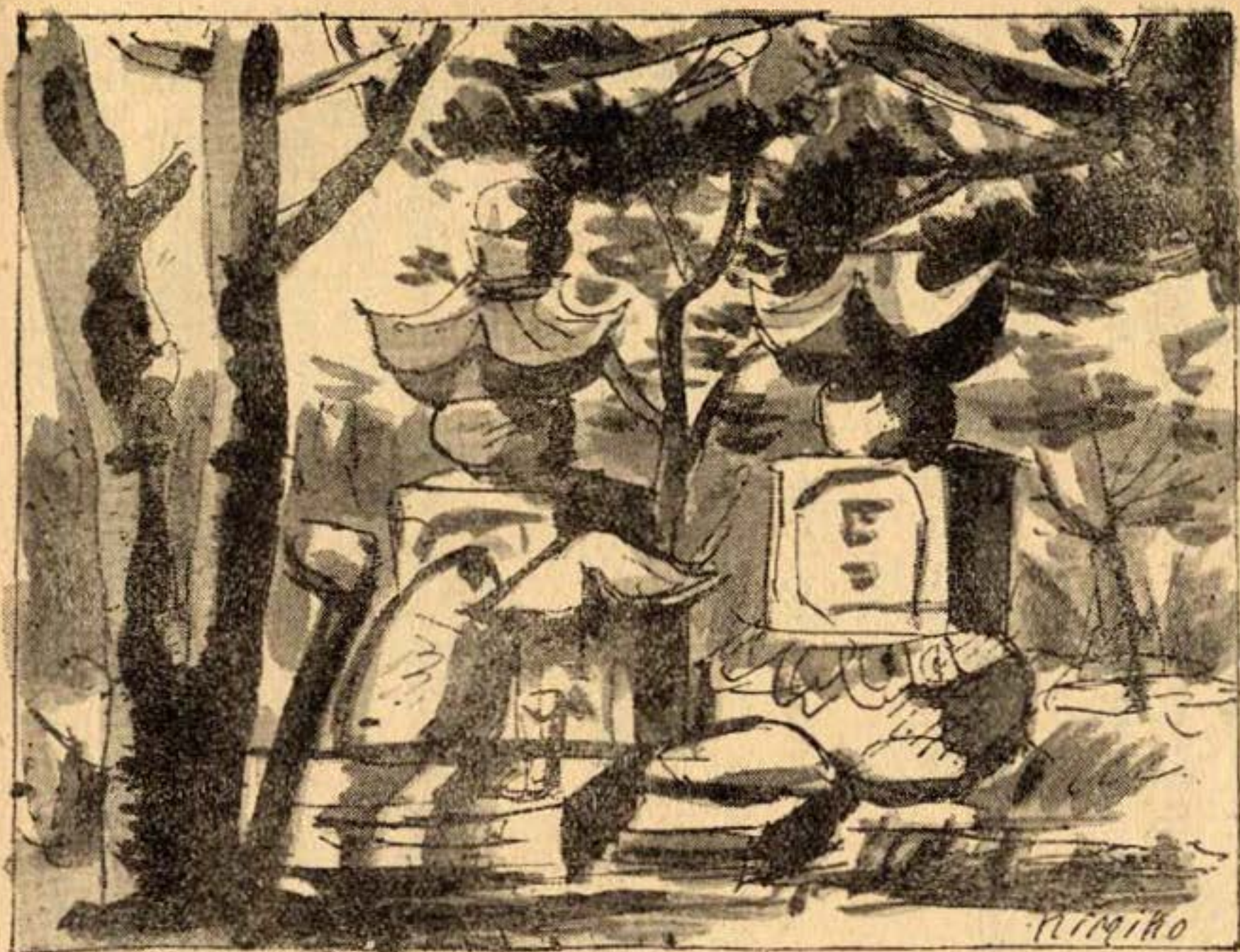
平泉より私の町までは約八里で、松尾芭蕉も此の道順で平泉より鳴子温泉地方に出たらうと考へられる道筋である。山形の白鳥村までは、約十五里もあらうが、いづれも古くから開けた路で、奥の細道」でも、鳴子から山越をして白鳥村の方向の新庄に出てゐる。

白鳥といふ姓はどのやうな分布で流れて來たにしろ、満更、私の町が全然、これと縁のないものではあるまい。

察するところ、これらのいづれかから流轉し土着し、刀を鋳に代へて、耕作に従事しても、郷土的な稜々たる氣骨を持つてゐたものと思はれる。

この町で一つの語り草となつてゐる白鳥長者の如きは明治初年ま

で、田植の時はその附近の通行人には必ず酒を振舞つたために、あ



まり酒を強ひられることを怖れて、通行人は廻り路をして通る人もあつたといふ。世智辛い今日から見ると嘘のやうな話で、また、嬉しいことではないか。

私の曾祖父の父は佛甚兵衛と呼ばれてゐた。これは佛教に歸依すること熱心だといふよりも「お人よし」といふ意味であつたらしい。併し、酒を嗜んで、その一升の酒代に畑一段を支拂つたといふ話もあり、現に私はその畑を見知つてゐる。

この無慾の「お人よし」は、見やうによつては、一つの信仰から來たとも言へる。

四

私の家の前隣は豆腐屋であつて、朝の三時といふと、いつも起きて豆をひいて居り、その手挽きのキーク、キークといふ竿の音が煩い私の眼を覚ますことも厭々あつた。

豆腐ひく音と鶏の聲は、いまだ闇の深いことを示し、夜が明けるのはそれから暫らくしてからなのである。

こゝの老翁は豆腐作りの名人で、これ位の豆腐はどの町でもないと言はれ、町に二軒など後に競争者が出來たが、とても比較にならないのである。

老翁の名は東右衛門といふて、念佛宗の先生だと言はれてゐた。この豆腐をひき乍ら、謠曲とも經文ともつかぬやうな聲で、太くな

にか口ずさみつゝ仕事をするのであつた。

東右衛門爺さんのこの唄聲は、他郷から来た私の兄嫁などには、とても可笑しいものらしかったが、私は幼少からきゝ馴れてゐて、何とも思はなかつた。

念佛宗がどうして私の町に盛んであつたかは、その原因を詳しく知ることが出来ないが、おそらく、人間として極めて有徳な人が宣教に見えて滞留した爲めであらう。

そして、あの白鳥家の墓地の老松と椿との下に、恐らく、永遠の涅槃を夢みつゝ、この忘られて無名の篤信者、宣教者は眠つてゐるであらう。

小學校の敷地は、てうど私の墓地を境として、墓地は改葬の醜いあとを残しつゝ、そのままに現存してゐる。

おそらく、交渉のしやうによつては、墓地が改葬されずそのままでも良かったのにと、考へられぬでもない。たゞ、考へやうによつては、小學校が學校の窓から墓石を望むことは、餘りいゝ感じのものでなからうし、或は、これらの兒童によつて、あまり大きくない墓石が時として持ち運びや玩弄物として惡戯されぬとも限らない。

その意味では改葬されねばならなかつたかも知れない。

何しろ、静かな日向の眺望のよい丘の上にある墓地が改葬を餘儀なくされたことは、一面からいふと遺憾でもある。

そしてこの「隠し念佛」なるものは、今でも、曹洞宗が全部であ

るやうに見える私の町の、或る底流をなしてその生命の火を燃やしつづけてゐる由である。

私は佛耶兩教いづれにも屬さないものであるが、祖先が信仰に歸依した一筋の性格が私に流れてゐて、私が文藝のうちの詩などに頑固にさへ思はれる執着を持つのもその血のためかも知れない。

私の町に汽車の支線の通じたのは大正十年かであり、それまでは、二里半の路を経て東北本線に乗らねばならなかつた不便の部落であつた。

併し、奥羽街道の一驛としてのこの部落は、決して、文化にひどく遅いところでもなく、寺の遍額の俳句や和歌を見てもこの部落の選ばれた人達は可なり風雅の道を解してゐたらしい。

佛教の信仰についても同様のことが言へるので歸郷の機に私はもつとよく調べて見たい。

細心といふもの

或時織田信長がお側の者に手足の爪を切らせて、森蘭丸にそれを捨てるやうに命じた。すると蘭丸は紙に包んだ爪を開いていつまでも不審さうに眺めてゐるので、「なぜ早くしない」と信長が云ふと、

「御爪一つ不足と見うけますが。」蘭丸は答へた。そこで信長は笑ひながら起つて着物の袖を振ふと、果して残りの爪が壘のうへに落ちた。



かげの人 (三來夜話)

—— 颯田諦眞尼のことども ——

増上寺法主

大 島 徹 水

かげの人

古今世に徳者と仰がれてゐる人物はまことに數多い。しかしほんたうにこの世のあらゆる執著を斷ち、名利を捨てきつて、自分の信ずる道をひたむきに、すなほな心をもつて歩みつづけて倦まなかつたと云ふ人物は、さうざらにあるものではないと思ふ。わしはつねに他に向つて、「かげの人」の力を説いてゐる。わしの云ふかげの人とは、さういふ素直な心構へで、世にかくれた善行を積む者を指すのだ。たとへば或者が或事業で成功したとする、するとその者は當然世に名聲を勝ちうるわけだが、しかし大抵の事業には、表面に立たぬ者後のよい協力者の庇護が大きいものだ。むしろそのかくれた力が、その事業を成功させた場合が多い。だがその場合でも、

事業の成功に眼が眩んで、その協力者が、「これはおれのおかげだ。」などと名乗りを上げて出るやうでは、わしの云ふ蔭の人とは別ものとなる。こゝがむづかしいのだ。わしはよく念佛者の信仰生活とはどういふものか、と訊ねられる。さういふとき、わしは「不平を云はず無理の氣もちなく仕事をしとほす生活である。」と答へてゐる。「おれはかういふことをしてゐるぞ。」と思ふから間違ひが出来て来る。「おれはかういふことをさせてもらつてゐる。」といつも思へばおのづから平和である。蔭の人とはどこまでもその心を忘れぬ人のことである。

諦眞尼の話

わしの話さうと思ふ颯田諦眞尼はかの高德いまも尙世人の

追慕して止まぬ本眞尼の肉妹である。愛知縣幡豆郡吉田町の颯田家に生をうけたこの姉妹は、幼い時からふしぎな佛縁にしつかり結びつけられてゐた。十一のとき姉の本眞尼から剃髪をうけた諦眞尼は、ひたすら姉の佛行をたすけて奮闘した。故郷吉田に本眞尼が徳雲寺建立の願を起したときなど、文字通り寢食を忘れて姉のため、法のために盡力した。念佛即仕事といふことも、このときから諦眞尼の心ふかくに植ゑつけられたと見て差支へない。また四國靈場めぐりに姉妹揃うて乞食行をしたこともあつた。明治十五六年頃である。

徳雲寺落慶後、數年を経て諦眞尼は京都西山泉谷の西壽寺の留守役として赴くことになつた。諦眞尼は弟子二人を伴うて故郷を後にした。ところが著いてみると、その寺の荒廢のさまに驚くのほかなかつた。そのうへ寺詣りも月に一度あるかないかといふ状態であつた。しかし諦眞尼は、この長年主なき風雨に傷められたままの山寺を、他人の手を借りずに盛返さんとする願をその時心にきめた。朝は未明に起きて弟子と一緒に掃除、建物の破損箇所の修理、村里の托鉢、夜は托鉢行によつて見聞した村人の困窮者への施物の製作、日課念佛は仕事中に少しも怠らぬこと、かういふ日々がすゝまれて行つた。はじめ奇異な眼をもつて、この尼僧達の生活を

傍觀してゐた周圍の人々も、いつかその眞摯な生活振りに惹きつけられて行つて、何くれとなく、手助けを申出るやうになつた。寺の修理でいちばん困つたのは雨漏りを防ぐことだつた。これは尼僧達の手では容易に出来なかつた。後で寺の世話人が山の木を賣つて修繕したが、それまでは雨降りのたびに他の仕事に差支へて迷惑したと云ふ。かうして十年ほどするうちに信徒も次第に殖えて、やつと寺の面目を維持できるやうになつたが、何しろ淋しい山寺で弟子の尼僧達がなかなか居つかずに弱つたといふ。

或時、諦眞尼は弟子と共に歸國せねばならぬ事情が出来て、翌る日發つといふ前の日の夕方、ひとりせつせと焚物を縁の下に積んでゐた。弟子が怪しんで問ふと、
「私がこの寺に来て最初に困つたのは、湯も沸かせなかつたことです。明日私が國に歸つて、もし戻れなくなる事情が生じたら、後へ入る方の不便を少しでも取除いて置くのが當然ではありませんか。」
かう諦眞尼は答へた。その歸國は實現されずにすんだやうだが、すべてがこの心がけだつた。

焼かれて施さる

これは諦眞尼が晩年になつてからのことだが、さる學問の出來た尼僧が東山の或寺に寄偶してゐて、その寺の住職への怨恨か何かで寺を焼いた事件があつた。それを耳にすると早速弟子に蒲團を背負せ、その寺に届けさせて懇に見舞つた。その住職は「尼に焼かれて、尼から施される。」と云つて非常に感激したさうだつた。

諦眞尼は大正十三年泉谷で七十一才で大往生を遂げたのであつたが、年をとつてからは持病の喘息を怖れて十年間ほど自坊のそとに出ぬやうになつた。しかし自室に臥せりきりになるやうになつてからも、自分で可能な範圍の仕事は、念佛とともに何事によらずなした。また老朽寺の用をなさず、と世話人達に告げて後進に寺を譲りたい意志も見せたがこれは皆から止められた。村の老人、盲目のために弟子を勵まして衣類、食物を一日も欠かさず施したことは今でもあの地で噂されてゐる。姉の本眞尼の社會教化事業のために、絶えず入用品を調べて送つたり、關東大震災のときにいかに心を碎いて救護の方法を講じたかは、言語に絶するほどだつた。

静かな往生

わしは諦眞尼の病ひが重くなつて、往生の二日ほどまへに泉谷を訪れたが、そのとき尼は床に臥せながらも實に明るい

眼差でわしを迎へてくれた。周圍でいろいろ話してゐるらしいが、葬式は必ず信徒達に知らせずに欲しいと云はれた。年一回の五月の寺法要のとき、村人に寺へ來て戴ければいいからとも云つた。諦眞尼の逝かれたのは十一月二十五日であるが、その臨終も平生とかはりない静けさで、弟子二人がそのとき寺にのこつてゐただけで、あとの者はみな法要その他の用で外出中だつたといふ。弟子の一人に湯を運ばせ、自ら身體を拭き淨めて「これでもう湯棺せずといふ。」と云ひ置き、床に入つて西を向き合掌念佛のうちに往生を遂げたのだつた。そのお側の弟子すら、師の念佛が絶えたので、はじめて、さわぎ立てたのだといふくらの静かな自然のままの往生であつた。わしもあとでその死顔を拜したが、あんな清淨な和やかな死顔は他にないと思ふ。——信徒、村人達の懇請を斷るにえらく骨折つたが、やつと遺言どほり葬式はお祭り騒ぎをせずすんだ。

諦眞尼はこのやうに學識とか才能の點では何のすぐれた點もなかつたが、わしの最も有難いと思ふ蔭の人の意味、——陰徳を積んでもものに執著しない、勞を厭はない、仕事そのものがおのれの信仰生活であつたこと、——を如實に身を以て示したことであつた。さうしてかういふ人こそ今の世に最も必要な存在であらうと信じて疑はない。(昭和十年五月)



輝く少年の魂

前田 信次

駆けくら

村はづれの土手に朽ちた木橋がかゝつてゐた。橋の手摺には苔が生え、中程にはベン／＼草が生えてゐた。その橋袂には毎日村の子供達が約束したやうに學校が退けると集つて來た。彼等の集合所であつた。皆か集るとお互に仲よく連れだつて隣村まで出かけたり、輪を作り唄ひながら遊んだりして日の暮れるのを忘れてゐた。何時も五六人は集つて來た。その中で一番丈の高い子は當年十五歳で又一番年かきであつた。名を勘太と云ひ、他の

子供にくらべて智能の發達が少しおくれゐた。そして又一番の腕白小僧であり、餓鬼大將でもあつた。一番槍にやつて來るのは常にこの勘太である。そのうち畔道や寺の門前から仲間が集つて來た。

「今日は皆で駆けつくらしで遊ぼう！」

「うん、よし……この橋袂から向うのお

地藏さままで、いゝかい？」

一同は彼に手をうつて讃成した。

「で、勝つたものはこれから俺達の大將だ

よ。」

誰ともなくさう云ふ者があつた。

お地藏さまは土手下の森を越え、彼方に小さく水車小屋と並んで道ばたに立つてゐた。こつちからは赤い凝掛がチヨツと見えた。

一人の子が道に一本の太い線を横にひいた。一同はそこに整列した。總勢六人で草履をぬぐ子があり、大抵は素足であつた。一番小さい子は勘太の半分位しか身の丈がなかつた。それでも一樣に列に並んだ。向うをヂツとにらんだ。片膝を地面に付け、兩手のこぶしをギユツと握つた。

「用意ッ！」

皆は息をのみ次ぎの合圖を待つた。誰ともなく「ドンッ」と云つた。一せいに砂煙を上げて走り出した。

矢張勘太が先頭をきつてゐた。段々各自のへだたりが大きくなつた。お地藏さままでは相當の道のりであつた。勘太は得意になり、充分餘裕をみせ、風をきつて走つた。

その直ぐ後には當年十歳の仲五郎かつといた。その二人を置いて他の子はズツとおくれしてしまつた。次第に勘太と仲五郎のせりあひ



仲五郎の負けじ魂が體中でムン／＼と燃えあがつた。もう一息で相手を抜くことが出来る。汗が流れて眼に入つた。それを振り拂ふこともせず、たゞ無我夢中。勝て！勝て！きつと勝つてみせる。全身の力と熱が一度にわきあがつた。

になつた。どつちが先頭をきるか。土手下では畑の中で頬被りをした爺さんが鋤をおき、二人を眺め、應援してゐた。二人は息をはづませ、頭をつき出し、お互に力一ぱいに走つた。然し五つも違ふ勘太に仲五郎が勝つ道理はない。

仲五郎の帯がほどけ、帯を道ばたに捨てた。着物がはだけ、足にからまつて走りにくかつた。着物をも道ばたに投げだした。仲五郎はシャツ一枚になり、齒を喰ひしばつて走つた。そのうち勘太の體はよろめき出した。然しズツと一同の先頭をきつてゐる。お地藏さまはもう眼の前に迫つて來た。

勘太は疲れてよろけながら走つてゐる。二人の間はほんのわづかだ。體と體はスレ／＼になりながら走る。斯うなつたら、チョツと相手の體に觸れ、ばヨロ／＼とよろけ、必ず仲五郎の勝ちとなる。體をぶつけてやれ、そして勝つのだ。勝てば俺が村中の大將だ！ほんのチョツと相手を突けばよいことだ。だが、だが、仲五郎にはそれが出来なかつた。突きとばせば勝てる、然しそれでは卑怯だ。負けるのはいやだ。卑怯なふるまひは尙更いやだ。勝ちたい、たうとう最後の決勝點に一步を踏み込んだ。矢張勘太が先頭だつた。疲れたため勘太は道ばたによろけころがつた。ころがりながら息をはづませ、

「俺が勝つたぞ、俺が勝つたぞ！」と叫ん

でゐた。

仲五郎はくやし涙がボロ／＼と流れた。まだこの先いくらだつて俺は走れる。もつと走ればきつと俺が勝つてみせるのに——。仲五郎は勘太に負けたのである。

仲五郎は幼少の時から人一倍負けず嫌ひであつた。その上、卑怯な眞似はケムシのやうに嫌ひであつた。

鮎切りの早業

それから一日おいた翌日。いつもの通り學校が終ると彼等は各自に土手の橋の袂へ集つて來た。

駈つこに負けた腹いせに仲五郎は何とかして勘太に一泡ふかしてやりたかつた。

そこで色々考へたあげく、これなら彼に出來まいと云ふある一事を腹にしまひ、勘太を誘つた。土手下の川岸に沿ふて二人は歩きだした。

草の葉を踏んでゆくのは楽しかつた。空は晴れ渡り、初夏の光りが照りかへつた。川は

浅く、水は澄んでゐた。やがて大きな木かげの下まで来ると、川底には小さい魚が澤山泳いでゐるのを見た。水が綺麗なで川底の魚がすいてみえた。鮎は幾匹も列をつくり、足音をきくと、ツークと川中へ逃げていった。そのたびに銀色の鱗が川底でひかつた。

仲五郎はソツと岸へ出ていった。小さな聲で勘太にさゝやいた。

「泳いでゐる鮎をこゝからきることが出来るかい？」

勘太は今まで蛙を殺したことはあるがそんなことをしたためしはない。だが、五つも年下の彼に出来ることを出来ないといふのは業はらであつた。

「出来るさ。それより一つやつて見せてみな。魚は生きてゐるし、水中にゐるんだぜ。」

「ようし、ぢややつてみるから、おまへもやつてみせるんだよ。」

「フン、そんなことわけないさ。」

仲五郎は持つて来た小刀をしづかに抜いた。足音を忍ばせ川面に身をかがめた。

水中の魚はそんなカケが頭の上でなされてゐるとは知らず、あつちこつちへ素早く身をかはすやうに泳いでゐた。

仲五郎は息を吞んで身構へた。ハツと思ふ間に一刀は水面にキラリツとひかつた。瞬間鮎は美事にきられてゐた。

勘太は水面に浮んだ鮎を見てホーツとあきれ、暫らく呆然としてゐた。やがて約束通り何回も何回も繰返してみたが、勿論このはなれわざは出来るところではなかつた。

たうとう勘太は仲五郎の前に頭を下げた。仲五郎はこのやうな敏捷さと鋭い神技を持つてゐた。普通の子には到底真似られぬわざであつた。彼はハレ／＼として家に歸つて来た。

母はその時臺所で夕飯の仕度をしてゐた。

仲五郎がニコ／＼して歸つて来るのを見て、「外にばかり遊んでゐて、悪さをしてゐたのではないでせうねー」とたゞした。

仲五郎は内の者に内緒で持ち出した小刀のことが氣になつた。母には氣付かれないやう

に後向きになつて居間へ上つて行かうとした。母はそれを見逃さなかつた。背後から、「チヨツと仲五郎お待ち、おまへの隠してゐるものは何？こゝへ出してごらん！」

内緒で小刀を持ち出したことは悪い。然し勘太を負かし、生きた魚をきつてみせたことは自慢していゝことだと心に思つた。

實はこれ／＼でしたと、今までのことを母に話した。

「それはよくないこと、結局いたづらことですよ。小さい生きものをきつてみてどこが面白いのですか。以後はつゝしみなさい。」と一應正しくないことを云ひ含め、

「物ごとに機敏であることはよいことです。その機敏であることも、そんな小さなことに用ゆず、もつと／＼大敵にむかつて働かせ、生かさなくては何んの役にもたちません。」と教へた。

仲五郎とは日本の生んだ世界の英雄東郷元帥の幼少、母とはあれまでに大きく偉くさせた生みの母益子刀自、その人である。



春 寂

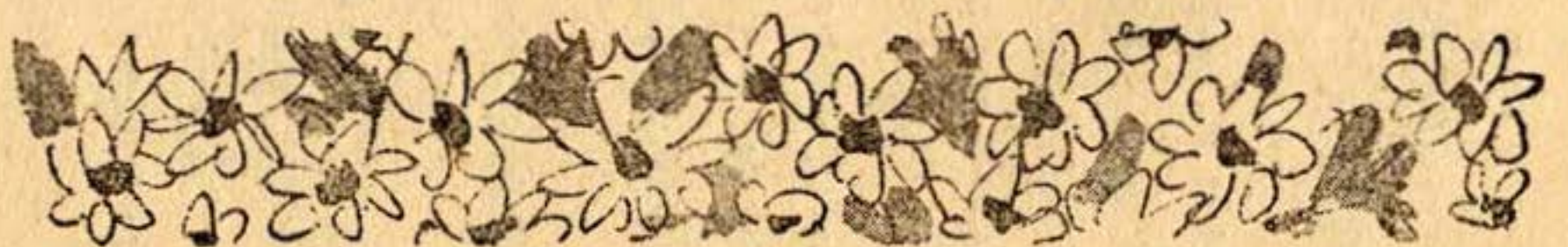
相馬 御風

越後は今年は雪が珍らしく少なかったので二月末からもうチカに土を踏んで歩くことが出来た。三月になつてから東京で雪が積つたといふやうなことを新聞で讀んで、何だか東京の方が反對に雪國になつたのではないかといふやうな氣がした位である。それほどこのあたりは春の訪れが早かつた。

燕の來たのは例年より十日早かつたといはれ、櫻の咲いたのも四月十日頃といふ早さであつた。そして折からの生暖い南風に、僅三四日で散つてしまひ、四月下旬にはもうすっかり葉櫻になつてしまつた。梅櫻桃李一時に開くといふのが例年このあたりの盛春のさまであるが、今年はずうは行かず、次々時をたがへて咲いた。全く珍らしい春であつた。

今私が坐つてゐる南向きの二階の窓から遙かに見える高い山々はまだ眞白であるが、目の下にはもう山吹が咲き、みづ／＼しい色の楓の若葉が風にゆらいでゐる。さゝやかな樂山ながら、そこには岩間にほの白くいかり草の花がゆら／＼ゆれて居り、擬寶珠の廣葉が日に光つてゐる。

時々キリキリキリといふ川原鶏の啼聲が空を通つて行く。濱の畑の菜種はまだ花盛りで彼等の 好きな實を結ぶには間があると思ふが、氣早な彼等ではある。つひ五六日前まで





毎日家のまはりに聞えてゐた鶺鴒の雄と雌と呼び交す澄んだやさしい聲が、急に聞かれなくなつたやうだ。おそらく彼等はもう巢籠つたのであらう。

去年は中庭の松の木の高い枝に巢をかけたが、今年は家のまはりには一つも小鳥の巢らしいものが見えない。雀すら巢をかけてゐないらしい。何となくさびしい思ひがする。

こんな貧弱な庭でも、そこを安全地帯と信じて巢をつくりに来る小鳥のあるといふのはうれしいことである。私は庭のどこかに小鳥の巢を見つけると、きまつて毎日のやうにそれが安全であるか否かに氣をくばるのであつた。たまに猫や鴉なんか近寄るやうなことがあると私はやつきになつてそれらを追拂つた。此春はさうした氣がゝりはないが、それが却つてさびしいのである。

信頼されることは、苦勞の種である。時にそのうるさゝに堪へなくさへある。しかし信頼して来るものゝないことは、これまた堪へ難くさびしいことであらう。庭の木に巢をつくりに来る小鳥のないことすら時にこんなに淋しいのである。

この頃の私は殆ど毎日のやうに二時間位全く一人きりで何もせず机の前にちつと坐つてゐることがある。敢て坐禪を行つて居るといふのではない。たゞぼんやりさうしてゐるのである。しかもその空虚の時間が毎日私にとつて最貴い休養の時間である。そしてその得られない日は、とかく何事をしても落着きが得られないやうでいけない。此の春のさびしさはさうした時間をよく私に恵んでくれてゐるので、その點はありがたい。

憂きわれをさびしがらせよかんこ鳥 芭蕉 ———— のこの句を口ずさむ。そして到處に寂しさに安住することの出来た芭蕉の心をなつかしむのである。(四月二十五日)





愛 の 話

— 女性のために —

眞 野 正 順

かりそめの色のゆかりの戀にだに

逢ふには身をも惜しみやはする

(法然上人)

(一) 女性の「たから」

女性にとつて最も尊いものは愛でありませう。か弱い女性にとつて愛の潤ほいの無いところは住むに堪えませぬ。

たとひ地位も高く富貴な家でありましても、其家庭の人達に愛が冷え切つてゐるならば、荒涼とした野にひとり冬風に吹かるゝ如くでありませう。

社會には屢々、うら若い女性が時に思ひ餘つて、人も美やむ宏壯の邸宅から自ら家出する。あの豊かな生活に何の不足あつて家出するのかと眉を寄せて人はこれを怪しむの

であります。其原因をよく尋ねてゆけば、多く、その家には愛が冷えてゐたのです。まことに愛の潤ほいなくして女性は生きてゆかれませぬ。富も名も、愛なくて女性にはすべて徒でありませう。

それゆゑ、また、愛の爲めならば女性はあらゆる苦しみに堪えます。愛する人の爲ならばあらゆる苦しみに堪えて行かうといふ覺悟、それは、あらゆる女性の胸に何時も用意されてゐるところでありませう。あの貧しい凶作地の娘等が、家のため親のため自ら身を苦界に賣つてゆく。人は

其無知を嘲ふ前に、その切ない愛の心根を察してやらねばなりませぬ。かうして我身を苦しめることによつて憂ひ深き父親の眉が解け、貧しい弟妹が物を買つて喜ぶと思えばこそ——その感謝の愛の温かさにほだされて娘は進んでわれと我身を滅ぼしてゆくのであります。まことに、女性にとつて「愛」はあの魚にとつての水に譬えられませう。水の潤ほひ無きところに魚はすこしも生きてゆかれぬやうに、愛の潤ほひのないところに、女性はずこしも安んじてをられませぬ。

このやうに、女性には愛なくして生きてゆかれぬものでありますと共にまた女性の最も勝れたる長所は其の愛であります。世に女性の深い愛の前に打克ち得るものは何ものも無い。男性にとつて遂に及び難いものは、女性の愛の力にあります。そこに温かい愛が包み溢れてゐると思へばこそ、母は尊く、妻はいとしく、娘は慕はしい。愛を缺いて女性の価値はありませぬ。たとひ、よき明貌と勝れた教養とを具えた女性であつても、其人の心の底が冷たく冷えてゐたならば、誰かこれを敬愛する者があるでせうか。あら

ゆる他の事においてたとひ男性を凌ぐ力があつたとしても其人の胸に愛の温かさが缺けてゐたならば、人は決してその女性に心服しないでありませう。むしろ、祕かにこれを嘲ふでありませう。愛を缺いて女性は、最早や女性ではないからです。

このやうに、愛は、それなくて女性の生きてゆけぬもの、また女性の女性たるどころ、云はゞ、女性の本質であり、無くてかなはぬ寶であります。

このやうな「愛」を佛教ではどう考へてゐるか。今日は少しこの事をお話しませう。

(二) 「愛」といふもの

さて、「愛」とは一體どんなものでありませうか。愛とは、まづ、愛するものと一つになりたい心と云ふ事が出来ませう。愛するものとびつたりと一つになり離れしとないころ。わが愛する友達は自分から遠く離れて行つてはいけない。何時もしつかりと自分に一つになつてゐてほしい。いつも一緒に居るばかりでなく、この胸と胸とがびつたりと一つになつて、自分の思ひが、そのまゝ先方にかよ

ひ、自分の心持の一つ一つが、そつくりと先方にうなづかれて欲しい。つまり相手をすつかり自分のものとしてしまひたい心持、それが愛であります。

それ故、つきつめて言へば、愛とは愛するものを自分の中に取り込んでしまふ事であると云ふ事が出来るでありませう。道を歩いて、店頭に可愛らしいフランス人形を見る。見ると少女の心はたちまち其れに吸ひついてしまふ。欲しくて仕様がなない。家に歸つて來てもすこしも心は落つかない。それを得てしまふまでは少しも心は落つかない。それでさんざ強請つてやつと自分の物とする。自分の物となつてしまへば、更にもう一層可愛らしい。寢ても醒めても自分と一緒にゐる。少しでも離れてゐるともう淋しい。かうして、だん／＼日が経つにつれて、少しづつ人形の顔も汚れてくる。拭いても取れない汚れがついてしまふと、小さい胸でひとりハラ／＼する。意地の悪い兄なぞにそこを指摘されると、もう悲しくて胸が一杯になる。それで汚れたところを押し隠し人目につかないやうにして、祕かにこれを悲しがる。まるで自分の身體に治えぬ傷でもついた

かの如く悲しがる。——かうした少女のなかの芽生えにははつきりと其姿を現してをります。愛はまづ愛する相手も、愛をしつかり自分の中に取り入れる。取入れて我が心をそれに移してすつかり一つになつてしまひたい心、それが愛であります。

それゆゑ、愛するものは自分から離れて行つてはいけない。何時も自分と一緒にゐなければいけない。すつかり自分だけのものとなつてゐねばならぬ。自分だけのものと思へばこそ、我身にも増していとほしい。自分のものになり得ず、自分から離れてゆくならば、もう心は落つかない。落つかないのみならず、果ては、憤ろしき心持を其ものに感じてくる。「可愛ければこそ、憎くさは千倍」である。

だから、愛には何時も、或るもどかしさが伴ひます。もつと二人は全く一つになつてしまふ事ができないか。愛するものが自分から離れてゆくと云ふ事を、全く無くしてしまふことは出来ないか、ともだへる。然し、社會は自分一人のために出来てゐない。愛するものはまた己れから離れ

てゆき易い。それゆゑ、愛には常に苦を伴ふ。愛するものが己れから別に離れてゆく切ない苦しみである。

それだけ、更に心はいらだつて來ます。わが愛するものは、どこまでも堅く／＼しつかりと自分に結びつけておきたい。それ故、愛はしばしば己れを以て愛する者に強い。愛情深い母親は屢々我兒からその自由をうばふ。

愛子の爲すことの一つ一つの隅々までも、氣にかゝつて容喙せずにはゐられないからである。だから愛深き母親の許に子はしばしば不幸である。また情濃き妻は、それだけ妬婦となる。愛が深く眞剣なだけに夫の自由が氣にかゝる。そうして夫の行動を掣肘し、果ては嘲けりまで交友の中にひき起す。

このやうに考へて見ると、女性の誇であるところの愛は、むしろ却て、己れを苦しめ、他を苦しめるものと云はねばなりません。愛強ければ、己れの中には「愛するものと別離する苦」が生れ、他に對しては「愛の網」をしつかりと絡みつけて、その自由を奪つてしまふ。然も心は絶えず安んぜず、時に醜い憤怒怨恨の情までも引起してくる。

かゝるものが果して女性の誇るべき寶と云ふことが出來ませうか。

實際、世間には、かやうな愛を考へて、それを以て「女性の特長」としてゐる人も、仲々多いやうであります。然し、このやうな愛は決して幸福の愛ではありません。佛陀は、かゝる愛を本當の愛から區別して、特に「愛」と名けられました。極力排斥せられました。かゝる愛は、我欲に根ざしたものであつて、まだ本當の愛ではないと斷定されたのであります。靜かに考へて見ますとこの愛は相手を自分の中に引込もうとするこゝろ、引込んですつかり自分のものとしてしまひたい心でした。かやうな愛は結局、相手を自分の中に引つ張り込み自分の物としてしまふ利己心に外ならぬのです。「愛する」と云つても、其者のためにしてやるのではない。自分の爲めに可愛がる。むしろ相手を自分の欲望の道具にしてゐる。謂はゞ愛の假面をかぶつた醒い利己心です。醒い利己心であればこそ、それが強くなれば、必ず自己を傷け相手を苦しめる。

かやうなものが、女性の誇であるとしたら、女性はむしろ

ろ賤しむべきものでありませう。

(三) 慈

靜かに考へて見ますと、愛には、今迄述べて來ましたやうな愛とは、別に、もう一つ異つた愛があるやうであります。

たとへば、病んだ愛兒の枕邊に座つて、心配そうに其寢顔を見つめてゐる母親の胸の中は、さつき述べて來た「愛」の心持とはすつかり違つてゐます。心配で心配で自分の事なぞ思ふ心は少しもない。愛兒が苦しうに顔を顰めて身悶えすれば、母親はまるで自分の身の中に錐でも刺込まれるやうに切なく惱む。たまさかに病兒が微笑なぞすれば、ほつと晴れたかのやうな氣持になつて無性に嬉しくなる。自分といふものが、すつかり病兒の中に移つて行つてしまふ。病兒の一喜一憂が即ち自分の一喜一憂になつてゐる。このやうな愛は、先きの相手と自分の中に引張込んでくる愛とは違つて、むしろ反對に、自分を相手に與へてゆく愛と云ふ事が出來まじやう。己れを空しうして愛する相手の身に自分になつてゆき、相手の喜ぶことに依つて自分も

喜びを感じる愛です。かゝる愛を、佛陀は先きの利己的な「愛」から區別して「慈」と名づけ、これこそ本當の愛であると言かれております。

「慈」は己れを空しうしてゆく愛であります。己れを空しうして、たゞ愛する者の爲めにのみ心を運んでゆく。野路を行つて野草の花を濫りに折つて歸らぬ心であります。可憐に笑んだ野草の生命を優しく勞わつて撫てやるやうなことです。愛することに依つて自分は何ものかを獲やうとはしない。ひたすらたゞ、愛する者の善かれとのみ念ふ。純な混り氣ない愛です。母は我兒と我が思のまゝに束縛しやうとはしない。むしろ其伸々とした動作を見て微笑む。子供の成育の中に、自分自らが伸びてゆくやうに感ずるかである。己れは空しく何等利己の混りはない。たゞ愛する者の幸福の中に押え切れぬ喜びを感じる。ほんとに愛が愛だけになり切つた、純な愛の眞髓、それがこゝに現はれて慈となる。

かやうな心であればこそ、慈はまた其愛する者をほんとうに生かしてゆく。かゝる愛を受け得たものこそ幸であ

る。どことも知れず、どつしりと、自分の全體を其隅々まで大きな暖かい情愛につままれて、安心して生きてゆくことが出来る。かゝる慈みをうけてこそ、小兒は初めてこの地上に伸々と成長することが出来、かゝる情に包まれてこそ、人は初めて安んじて精一杯に自分を發揮して事業を遂げる事が出来る。慈はたとへば大地のやうなものである。あらゆるものは、そこに輝々として成長する。

それゆえ、かゝる慈こそ何者も打克つことのできない愛であります。温かい胸を大きく開いて相手をいただき、しげ／＼と、たとへば水の潤ほふがごとく温く、それを育て、ゆく愛の力。それに打克ち得るものは何者もない。これに背くことは、大地と闘ふやうなものだ。

女性が男子にすぐれて尊いのは、かゝる慈を豊かに見えてゐるからです。かゝる慈がその胸に湛えられてゐればこそ、男子は遂に女性の優しさから離れてゆく事が出来な。女性の愛が「大地」にたとへられ「世の寶」とせられるのは、全くこの「慈」のためであります。

(四) 「三 從」

東洋では、昔から「三從」といふことが言はれております。「女は幼くしては親に従ひ、長じては夫に従ひ、老ひては子に従ふ。」これは屢、女性に其一生を通じて屈從を強いるものとせられ、近代の女性からは嫌はれてゐる言葉であります。三從には確かにそう云ふ風に解釋される節のあるのも事實であり、また、そう解釋する事によつて好い氣になつて女性に盲從を強いやうとする卑怯な男性のあることも事實です。然しながら實はこれは三從に含まれた深い意味を正しく理解したものではありません。「從」と云へば、すぐ「屈從」と考へることはむしろ近代的な淺い解釋です。佛教などでも「從」にはなほ「それを手頼りとして進む」と云ふ意味を含んで用ひられております。三從とは、むしろ、女性が「それを手頼りとして」優しい慈をつぎ／＼に發展してゆく段階であります。はじめに親を、やがて夫を、最後に我兒をと、つぎ／＼己れの温かい慈の中に包みつゝ成長してゆく女性の尊い慈の段階を教えたものに外ならないのです。

女の一生はさまざまの段階を踏みながら慈を次第によ

り深く展開してゆく過程であります。

慈ははじめに我が近きものを掻き抱きます。可愛い人形に頬づりしながら圓な眼をあげて我が母親を凝視する幼女の柔かい胸の中にも、すでに愛は萌し初めてゐるのです。が、その姿をはつきりと現はして来るのはやゝ長じて友を得た時であります。親しい友を選んでしつかりと己が愛に包みこむことに依つて、自分はいつか其友となつてゆく。友の嘆き友の喜びは、さながら我胸に響ききたつて共に泣き共に笑ふ。かうして互に融け合つて優しい情の流る中に、二人は互に勵まされ、豊かにされてゆく。

しかし、愛が遂に其全體の姿を現はして来るのは結婚です。二人はもとより性を異にし、生立を異にし、その初めにあつては優しい新妻の胸にとつて夫はさながら異邦人でありましやう。かゝる二人が互に一つとなつて全く新しい生活の築いてゆかねばならぬ。妻は未だ知られざる夫へと我が全身心をあげて包みかゝり、優しくそれを融かしてゆく。妻は、全く己れを夫の中へ與へ夫の性格境遇に従つて己れ自らを改造してしまはねば、夫は遂に己れのものとな

らぬ。己れを空うして相手を生かし、相手を生かすことに依つて相手は己がものとなると云ふ慈の正體がこゝにまさしくと現はれてくる。かくてこそ、妻は夫のより善き半身となつてくるのです。

然し、やがて妻は母となり兒に對する時に到つて女性の本質たる慈はまつたく其完成の極に達します。兒に對しては母はほとんど其すべてを與へるからであります。兒の一舉手一投足は、母の眼には、その母みずから再び幼くなつて、そこに現はれたかの如く映る。兒の顰めたる眉はたちまち母の憂ひの種であり、明るき笑顔はたちまち母のむすぼれを解く。されば子の惡癖を矯むるときにも、母は涙なくして怒ることが出來ぬ。忌はしい兒の惡癖は、母みずからの惡癖を見る心持がするからであります。これを子に叱りつゝ、母は我れと我身を鞭うつ思ひがする。喜ぶときにも、母は遂に感じて泣く。喜びは二重になつて、はち切れるやうな満足が押へても押へ切れなくなつてしまふからであります。まつたく母の愛に至つて慈はその完成の極に達する。さればこそ、かゝる温かき大地の上に兒は

すく／＼と生い立つてゆく事が出来。地上文化のあらゆるものゝ母胎は母の愛であると云はれるのであります。

己れを空しうして他に與へ、相手になつてしまふ事によつてそれを生かしてゆく女性の愛はこのやうに初めに、親や友達に向ひ、やがて夫にむかい、遂に我子へと向ひ來つて、その完成の極に達する。かゝる慈の成長してゆく徑路を現はしたものが、即ち「三從」なのであります。

(五) 佛とゝろ

慈は、このやうに己れを空しうして他になつてゆく尊い愛であります。かゝる慈が東洋に發達したのは、「無我」を生活の基本にする佛教の力によります。

佛教では、人間の生涯の意味は佛心を開發してゆくことにあると申しております。佛心とは何であるか、觀無量壽經によりますと「佛心とは大慈悲これなり」と述べられてをります。大きな慈悲——さきの慈が限りなく發輝されて最も完全な姿に圓滿したものの、それが佛心であります。印度の經論なぞ見ますと、慈が次第に成長して行つて遂に大きな佛心に達する段階が書いてあります。慈の

初めの段階は衆生縁の慈悲と名づけられます。己れを空しうして友の中に、夫の中に、子の中に、また様々の人の中に擴がつてゆく慈愛のこゝろです。つまり、眼の前の人間や生物を縁として現れてくる慈悲ですから衆生縁と云ふのです。次にこれが更に擴がつてあらゆる生物より、一切宇宙のあらゆるものゝ中に擴がりそれを包みこんでゆく慈となります。それが法縁の慈悲と名づけられます。あらゆる法(もの)を縁として現はれる慈悲だからです。

このやうにして次第に慈が純化し切つて、遂に完全な境地に達しますと、もう何物かを縁として現はれてくる必要はない。慈悲が慈悲だけで、其まゝ限らない光を放つ。即ち無縁の大慈悲となつて、こゝに玲瓏たる佛心が完成する。——この段階に就ては、まだ詳しく細々と説かれてありますが、今は略しませう。

兎にも角にも、佛と云ひますと、何か遠いところに在るものゝ如く感ぜられますが、實は人間おのづから心の中に既にその種子を宿し、其影を映じてゐるのです。それが順次に展開してずつと佛にまでとゞいてゆく。人間の向上は

即ち佛心に深くなつて行く事であつて、佛は即ち人間の眞の本質に外ならぬのであります。

靜かに顧みて見れば、女性の一生の變化は、やがて、優しい女性の胸に點ぜられた佛心の芽が次第々々に展開してゆく姿であつたのであります。人形に頼りする幼女の昔から、あの大海の深さに譬へられる母の慈愛に至る迄、思へば、大いなる佛心の現はれてくる姿であつたのであります。

(六) 信仰と愛

然し、かゝる尊い佛心の種子も、私共の肉體の中では、狭い利己的な愛と共に置かれてあるのであります。それ故、あの無心の幼女が人形に對して覺える愛情は、むしろ初めは利己的な愛でありました。かゝる利己的な愛の間から淨らかな慈が次第に浮み上つてくるのです。然も、この利己的な愛は、成長した後となつても、絶えず私共に纏みついてゐる。

友に對する友情にも、我兒に對する慈愛の中にも、絶えず纏みついて來ます。それ故友に優しかつた娘が、夫を獲

ると共にたちまち執念深い妬婦に變じ、子に優しかつた母親が嫁に對しては忽ち慳貪な姑となるなど、優しい慈はしばしば醜い利己的な愛へと轉落します。そうして女性の尊い使命を我れと自ら塗り消してしまふ事が多いのであります。

かく纏みついて來る「愛」を押のけ、女性の尊い本性たる「慈」を立派に發展してゆくためには、その進みゆく目權をはつきりと見定め、それに全身を傾けてゆかねばなりません。

女性の眞の目標は佛心であります。このやうに目標をはつきりと見定め、絶えず輝く大慈悲の御佛を仰ぎ唱えてゆく生活、それが信仰生活です。内に優しい慈愛の芽をいたはり、外に御佛の完成せる大慈悲の光を仰ぎながら、絶えず御名を唱えながら、輝く光の世界に入つてゆく。かくてこそ、女性の尊い本質も、泉の流るゝが如く現はれて來るのです。

——それ故、歴史を顧みて見ましても、眞に仰ぐべき女性性は常に信念ある女性でありました。

私の尊敬する偉人

松 浦 一

私の尊敬する古今の偉人一名だけをといふことでありますから、私は法然上人御一人の御名を挙げます。この吾々の生活に六字の名號を以て直接に明瞭に美の淨土を開示された吾々の上人です。吾々は上人の御全身に念佛を見ます、往生を見ます、彌陀を見ます、淨土を見ます、吾等の生命の實相を見ます。

岩 波 茂 雄

- 一、西郷南洲。
- 二、私心なきが故に。

加 藤 精 神

- 一、弘法大師。
- 二、大師の學徳と凡即是佛の大理想に終始して嚴淨佛國の大活動を示現せられたる點とを尊敬す。

- 一、貴下の尊敬する偉人一人
- 二、どう云ふ點で尊敬するか

川 路 柳 虹

- 一、尊敬する偉人といつても日々禮拜私淑するやうな偉人は一人もありません。たゞ偉人として感服する人物は各方面に五百や六百はありませう。
- 二、小生は何人にも私淑禮拜いたさず偉人平等論者にてそれ〴〵の價値を充分認めるだけです。所詮「我」は「我」よりほかなしの信念故。

小 笠 原 長 生

- 一、東郷元帥。
- 二、至誠一貫の人たるが故に。

翁 久 充

- 一、釋迦牟尼世尊です。
- 二、如何なる點でも尊敬に値しないと云ふものはありません。恐らく現存の佛典と云ふものは皆世尊の作ではないで

しようが、それはどうでもよい。たゞ人生の眞を求めて、所謂眞劍に世間を出離して、あの説法までの境地に入られたことそれが尊い。世尊のことはくたゞ書かなくても、この「淨土」の讀者は皆知つてゐることである。

池 部 鈞

- 一、渡邊華山先生。
- 二、彼の熱情から溢れる彼の藝術、行ひすまして居ない所が好き。

鶴 見 祐 輔

御問合せの御葉書有りがたく拜見致しました。偉人鑽仰の風を御獎勵の件まことに結構に存じます。小生はあまり澤山の偉人を鑽仰致して居りますので却てハガキでは御返事致し兼ねます。

石 川 日 出 鶴 丸

- 一、法然上人。
- 二、宗祖として、師父として。

信仰相談

擔當 佐藤 良智

(問) 淨土宗の御説教を承りまして吾々は

共に生きてゆく、即ち共生きでなければならぬ、共死ではならぬとの事よく判りました。が吾々が生きてゆく上に共死でも共生でもなく人の生命を奪つてでも生きなければならぬ即ち刑法上の緊急避難や正當防衛の如き場合如何にしたらいものでしやうか。必ずしも生命の問題ばかりでなく財産の場合も該當する時があると存じます。何分の御示教を御願ひ致します。(川崎市・南町・小林傳次郎)

(答) 緊急の時や非常時の時の心の持ち様についての御質問と存じますがそれ等のことは前もつて豫知されない事でありますから

そのトツサの場合どうしたらいかといふ事は常平生シツカリした心を持ち、信仰の道に深く進んで居ればその時の處置が自然に浮んでくると思ひます。時にはこの肉身は滅してももつと大きないのちに甦るのとさへあると存じます。大いなるいのち(無量壽佛)に歸依しあとは御まかせする境地に住して頂きたく存じます。何卒信仰のことは理論ばかりでなく深い實感をともなふ様にして下さい。

(問) 自分は七ヶ年間病床にあります。長年の事とて佛の事に頭を入れどうしても「いけない」事がありますので、自分の様な愚鈍のものにもよくわかりやすく御答へ下さい。法然上人の一枚起請文に「南無阿彌陀佛と申せば疑ひなく往生するぞ」との意の言葉がありますが、疑ひなく念佛申すには如何やうにすべきでせうか。自分は疑ひない様に疑ひない様に申さうと思ふがどうしても疑ひない様になれません。これで極樂

に往生出来るものか出来ないものか疑ひが解けません。(朝鮮忠清南道太田郡・蟹江廣吉)

(答) 長い間の御病氣御察し致します。私は卒直に申しあげます。どうぞ口に出して御念佛を一日なり十日なり一月なり申してみして下さい。あなたの疑ひに満ちた心は當然と存じます。凡夫の私共疑ひのない方が不思議な位です。極端に申せば疑ひの無くないに至らぬ私共であるからこそ如來さまは私共をお念佛により救済しやうといふ大慈悲心をお起しになつたのだと信じられます。疑ひながら、疑ひを失くさうと泣きながら一心にお念佛申せば自ら理窟ではない清らかな力強い信仰の世界が開けてくると存じます。特に淨土門は理論的に解釋して、然らば行かんと云ふ様な呑氣な立場を捨て、この道より外に行く道はないといふ眞剣な自己反省から身を以つて飛び込みそこに自ら開けてくるものに乗ずるといふ

實行の宗教でありますから疑ひながら煩悶しながらもそれらに怖れずお念佛申され純な眞剣な貴殿に安らかな信仰生活の訪れる日を念じます。

(問) 私の知人であるAは某家に養子にゆき一人娘と結婚し子をあげた後にその家の血統は現代の醫學では直し得ない病氣のものでした。Aは子迄爲した妻を可憐に思ひ、現代教育を受けた身だった人が人の勧めにより病を神に祈つて直すと言ふT氏を訪ねた處、貴下は前世に悪因を造つたからそんな事になるのだ○○○命といふ神を頼めば直せると言つたがそんな事を信じて困つてゐる人のあるのを知つてゐるAはこれを斷り、仲人に話しをし家に歸つてゐる。諦めればよいが諦められない。過去の悪因は信じられない。現世に悪いことをしないのに何故こゝろ苦しまねばならないと言つてゐる。佛教や淨土宗ではどういふ風に解釋なさいますか。(兵庫縣・一青年)

(答) 御知人の御境遇眞に御察し致します。

おたづねの過去世の悪因といふこと、佛教ではすべて「因縁所生」と申し何事も縁によつて成り立つと解釋しその因縁の動きのうちに業(過去世の報ひ)を強調する宗派もあります。しかし今友人の實感としてこれがあれば兎に角、信じられないと言はれるのですからそれを取り立て、言ふ事はありません。御病氣の血統と申せ絶對的の病の血統など無いと醫學上聞いて居ます。病氣の事は慎重に確たる醫師に御相談になりそれによつて根本方針を定め、似而非なる宗教に迷はされず、與へられた人生(この事實の因縁は遁れ得ません)その境遇を如何に打開してゆくべきか。そこが最も必要の處と思ひます。正しい宗教によつて新人生を開拓してゆかねばなりません。貴殿も眞の友人として力になり、また御當人の御來信も望ましく存じます。

(問) 私達が生きてゐることが出来るのはみ

んな阿彌陀様のおかげだそうですが、どういふわけです。私達が人間に生れて來たのも病氣になるのも、自分の前生からの業因であると思ひます。私達が生きてゐるのは食物があるからです。食物は太陽、自然のたまものと思はれます。阿彌陀様から食物や身體をもらつてゐるとは考へられませんか。私はこのことで苦しんでゐます。わかりやすく御教示下さい。(青森縣の北隅・迷へる青年生)

(答) 凡ての現象は皆な色々な縁に依つて起るものですが、この色々な諸條件の内最も強いものが、それを引きづつて行きます。もし此諸條件をよく整理して悪い結果を現成しないやうに心掛けるのが、道徳行爲とか戒律生活とか云はれるものです。然し信仰に依りますと、一切の行爲がそれに統一されますから、私達の一生が一つの方向に向つて流れます譯で、それを「阿彌陀様の御蔭」として喜ぶのです。(四八頁(續))

法然上人をめぐる人々 (その一)

橋の上の道心

—— 巷の求道者、禪勝房 ——

中 村 康 隆

求めあへぐもの

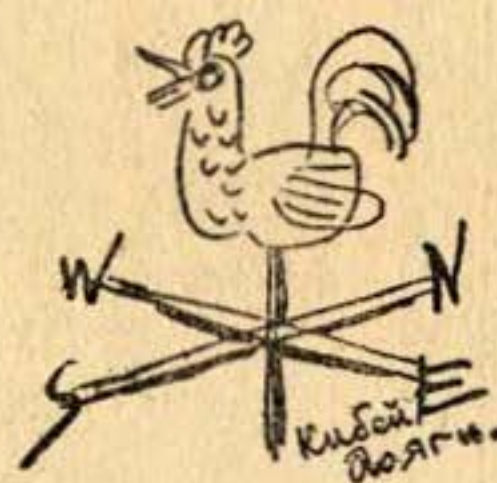
ちまたには馬の背に後向に乗つてその街道を東行した一人の僧形の男のことが、人たちの口の端に上つてゐた。この僧形の男が、實はかつて熊谷私黨の旗頭として源平數度の合戦に武勇のほどを謳はれた熊谷の次郎直實の世を据てていま蓮生と呼ぶ、その旅姿であることが、その珍らかな逆馬の念佛行が、こここの話の種であつた。

いまし、ふと、行きづりに此の驛路の世話に耳を止めた一僧があつた。ゆきなやみ、求めあぐむ心の焦燥は、その調つた若く美しい

顔色にも蔽ひがたなくうかがはれたのであつた。みれば、まことに、感動の念を眼に浮べてゐるではないか。

ここで私は、この僧の身分を明かしておかう。

いまの東海道線袋井から少し北に入ると秋葉本坊たる可睡齋がある。この本坊と秋葉山との半途にある海拔二千八百尺許りの、高くないが金剛密院繁昌坊といふ古刹の在るので知られてゐる大日山から流れ出てゐる太田川のほとりにある森町(静岡縣周智郡)は、袋井から静岡電鐵で四十分程北上した終點で、農林の局所的(ちよつと)地をなしてゐる。その町はづれにある蓮華寺といふ天台の古刹は、今でこそ明治の改竄にひどく荒れはててはゐるが、行基菩薩の開建(CADICU)にかかり、十五世慈覺大師の中興で(CADESTI)、それ以來法相宗から天台宗にと轉じて、その頃は此の地方、當時の本宮山一ノ宮小國天神(森町の西方一里余、國幣小社)の神領、天の宮衾



田の郷一帯の本寺であつた。

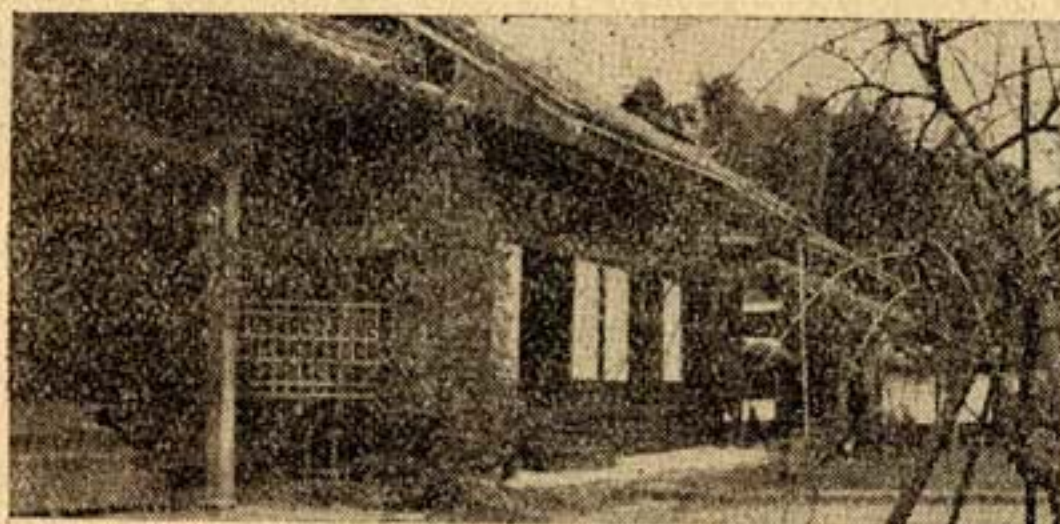
いま、途上に感激の面體を浮べて佇立する僧は、この蓮華寺七十七世の住、禪勝なのであつた。時に戀西と記したほどの熊谷入道蓮生の一筋に淨土門に歸入した心根が、いたく、此の僧の心をうつたに相違ない。やがて、武藏國熊谷の里を指して草鞋ずれの足をまはす、ひたすら、東への道を急ぐ彼の姿が見出されたのであるから。

これが、天台の古學に依て遂に救はれ難かつた禪勝の念佛門に轉向する、そもその道行であつた。時に二十九歳。高倉帝の承安四年 (CADI174) の生誕といふから、建仁二年 (CADI202) に當るわけである。

橋の上の道心

東への道は、やがて西方への道であつた。蓮生から法然上人の教を聴いた禪勝は、上人への舉狀 (紹介狀) を懷に再び幾山河を越えて吉水へと急いだ。

いま、京洛の風光をいとしみ眺むるこの人生の旅僧の胸には、實に寥しくも遺瀟ない情感が去來してゐる。昨日のやうな、また遠く果敢ない過去のやうな哀愁の繪卷が、その涙にうるんだ眼底に繰り擴がるをふりはらないでゐる。既に散つて了つたものではあるが、このロマンスの花を觀ずしては、その後彼が歩ん



(寺 華 蓮)

だ行程の秘められしターニング・ポイントを知るよしもないのだ。そのとき、禪勝は修學のため京洛に住んでゐた。美男の彼に都の誘惑は多彩であつた。しかし、既に三十に近く、流石に人生を想ふこと厭ふとなつた。而も、ともすれば絃歌のさざめき、愚かに輝やかな遊興の數々に惹かれゆく、自らの心境に對して、深い焦燥さへ彼は感じて來た。これでよいのか！ 自分の辿りたいのは求菩提の一筋であるべきに、兎角と脇道に逸れたがる心！

情なくなつて禪勝は、清水觀音に七日參籠して、「道心つけ給へ」と一心に祈願をこめた。ところが、六日目の夜、明朝下向の折石橋のつめで最初に行逢ふ女房を妻と頼むがよいとの、思ひもよらぬ示現を被つて、一生の戀を拾ふことになつた。

それが自分の性得なのかと、半ば歎きながら、一目、石橋の詰に待つ十七八の若い貴女を見た時、彼は一切を忘れて了つた。それほど女はあでやかに麗しかつた。深窓に育つたロマンチックな乙女心のひたすらな戀への憧憬ゆゑに、秘かに夫を祈つて得た示現のまゝに、侍女一人つれての忍び姿であつた。かうして結びつけられた戀ではあつたが、美男と美女との互の胸は燃えた。人目ない曉方の石橋の詰に咲いた奇しき火華！

おほよそ、幾許の時がたつたであらう。佛意に相寄りし二つの魂

は、互みに過方行末を語り合ひ、永劫の契を盟つた。やがていま一宵の参籠をすませて一條今出川南類上土門（或は南土御門ともいふ）の女の宿所を訪れようと、かたい約を交して、別れた禪勝の胸底には、別離を惜む女のうらめしげなる瞳の色が何時までもこびりついて離れなかつた。そして染めてくる黎明の空を待ちかねて、石橋をはしりおり、女の家を訪れると、昨日の朝供をした侍女が出て、禪勝を見るや、わつと許り泣き伏してしまつた。漸々に譯をただして、禪勝は唯々眼前の晦さに聲をのんでなくのみであつた。昨日あんなにも歡んでゐた女、家に歸つても明日の日を心待に待つてそのみを云ひ暮し、あれこれと家の内を取りかたづけさせてゐたのに、急に夜の亥の刻（十時頃）から胸を痛んで二時間ばかりして亡くなつたといふ。見れば、まことに苦んだであらう、見るからに心残りな亂れ顔して泪の跡さへ消えてゐない。禪勝は死者の手に取りすがつて悲んだ。そして

契りをきし人もや尋問ひくると

今夜ばかりの命をもかな 二九也

との、御障子の色紙にみだれにじむだ辭世を繰返しみては、無常の世を泌々と嘆いた。人生は數奇であつた。そしてそこには、まこと明日をも知らぬ生のはかなさがあつた。蓮生の舉狀に依つて法然を尋ねた禪勝は、きつとこの悲愁の情想



（む國を面前りよ山僧寺華蓮）

を打明けたことであらう。この哀話の唯一の記録である『法然上人秘傳』の著者（隆寛律師と傳へらるる）も、禪勝をして情感を以て告白せしめ、さして御庵室へは参りて候なりとなく／＼ばかり申せば、上人是を聞し召して涙をながさせ給ひて、さては觀音より給はりける道心なり、源空申さずとも御往生疑ふべからず、殊更に御物語侍りける。」と傳へてゐる。

給仕百餘日

かやうにして、吉水の庵の扉をたたいた禪勝は、四條萬里の小路に住つて、百餘日といふもの毎日祇候しては、何かと信行の疑念を問ひ尋ねては、益々念佛の歡びを深めるのであつた。その間の彼と上人との問答は上人傳の諸書に見え、而もそれは上人の法語中でも特に光り滴る一連の珠をなしてゐる。ここには『勅修御傳』の七ヶ條、『法然上人傳記』（所謂『九卷傳』）の十ヶ條の問答、『和語燈錄』の四ヶ條の法語等の中、二三を抄出してみやう。

○淨土一宗の諸宗にこえ、念佛一行の諸行にすぐれたりといふ事は、萬機を攝するかたをいふなり。

○念佛の機は、ただ生れつきのまゝにて念佛をば申なり。智者は智者にて申てまれ、愚者は愚者にて申てむまれ、道心ある人も申てまれ道心なき人も申てむまる。……

○末法の中には持戒もなく、破戒もなし。……この上は持戒破戒の沙汰あるべからず。かくの如くの凡夫のために、おこしたまふ本願なれば、ただいそぎてもいそぎても、名號を稱すべし。

○信をば一念に生ると信じて、行をば一形に勵むべし。

○現世をすぐべきやうは、念佛の申されんかたによりてすぐべし。念佛の障りになりぬべからん事をば、いとひ捨つべし。一所にて申されずば、修行して申すべし。修行して申されずば、一所に住

して申すべし。ひぢりて申されずば、在家になりて申すべし。在家にて申されずば、遁世して申すべし。……三途にかへるべきことをする身をだにも、捨てがたければ、かへりみはぐくむぞかし。

し。まして往生すべき念佛申さん身をば、いかにも育くみもてなすべし。

○いけらば念佛の功つもあり、死なば往生うたがはず、とてもかくてもこの身には、おもひわづらふ事ぞなき。

からして、常に眞摯な彼の求道態度は、上人給仕の弟子の中でも特に光つて居り、上人の殊遇をも受けられたやうだ。「信心堅固のほ



(像座房勝禪山開寺光林)

まれありき」と『勅傳』にも記されてゐる。しかし、かやうな賞讃は禪勝にはこそばゆかつた。何かと人に先だつては上人にお尋ねせず、にゐられない昔の學解の癖。そして自身には再び都の生活に慣れてゐる。免もすればうすれゆく道心。これではいけぬと念佛にいそしめば、心なき過褒に我知らず名利になずんでゆく淺間しさ。あはれな、何

たる人間の心だ！ 所詮、都にゐては自分の佛道は啓かれない。やはり、田舎に歸らう。田舎に歸つて人知れず自分の菩提を求め、亡き愛人の菩提を弔はう。

禪勝はかやうに考へて上人に暇を乞ふたに相違ない。上人もその惱みを察したのであらう、別離の御訓をされて、「聖道門の修行は智慧をきはめて生死をはなれ、淨土門の修行は、愚癡にかへりて極樂にむまる」と仰られた。愚癡にかへる！ それは禪勝の求めてゐた道ではなかつたか。禪勝の決心は定まつた。一介の田夫野人にかへらう！

露巷の行者

それからわれわれは、禪勝を市井の生活のなかに見失つて了ふ。いや、さうではない。天台の僧侶とし一寺の主としての禪勝を見失つてしまふのである。われわれが後に彼を見出した時に、彼は番匠(大工)をして糊口してゐた。ささやかな陋巷の小居に自らを隠して、人知れずひたむきな念佛の心を育ててゐた。偶然ではあるが、

二里餘り離れた久野（または久能）といふ村（可睡齋近在）の作佛房といふ山臥も、熊野の示現を受けて上人を訪ね念佛の徒となつたが、やはり故郷に歸つて後は、市に染物等を賣つては世を過し、端座稱名の姿のまゝその生を終へたと似てゐる。兩者に交遊があつたか不明だが、恐らく禪勝も次の事件なかりせば、名もない一番匠として遂に露巷の一隅に埋れて、死に至るまで、何ら花々しい立役者としての登場をもたなかつたであらう。

事件とは並檀の堅者（山門法華會の廣學堅義の時の質疑應答者）定照が「彈選擇」を作つたのに對して隆寛律師が「點選擇」を著して完膚なくこき下したので、カン／＼になつた定照が、山門の衆徒をおだて時の座主淨土寺大僧正圓基にせまつて宸襟を惱まし奉



（禪勝上人の墓）

り遂に勅許を得て、法然上人の大谷の墳墓を露き、房舎を壊し、あ

まつさへ隆寛、幸西、成覺等念佛義宣布の時の指導者達を犯へて流刑に處した後堀河帝嘉祿三年（AD1227）六月廿二日頃の法難である。

隆寛は小納言資隆の三男で肥後阿闍梨皇圓の甥に當り、慈鎮和尚門弟中の重鎮、觀山領袖の一人として、念佛門に歸しての後もその拔群の器量をうたはれ根本中堂の安居の結願にも推されて導師を勤め、傳教大師以來の名導師と褒賞されて、僧正でもない身に東西の坂を乘興すること許されたほどであつた。しかし、この事件では發頭として、名も山の遠里と改められ奥羽の粟津耶麻郡（福島縣耶麻郡上之宮村、この結縁により實成房が淨土宗願成寺を建立した）に配流されることとなつたが、宰領の森の入道西阿が同信であつた爲、奥羽へは弟子の實成房がゆき、八十の老師は西阿の住所相模の飯山に伴はれて、その年の十二月十三日病没したのであつた。

その途中のことである。七月五日の出發だから二十日頃であらうか、遠州の見付の國府に逗留せられた。例に依て近隣の地頭豪士等が聞きつたへて集つて來てゐる。秋風は立つたとはいへ、照り續いた暑い日の朝であつた。

律師は法談のあとで、人たちに訊ねた。

「この邊に蓮華寺といふ古いお寺があるでせう。そこに禪勝房といふ念佛のひじりが居る筈ですが、どうして居るでせうか。私とは古い友です。またの機會もありますまいから、是非會つてゆきたいものです。」

「さあ、蓮華寺といふ寺はここから三里餘り奥の天の宮の金田にある立派なお寺ですが、そいふ念佛行者が居るやうなことは、噂にも聞いたことがありませんが。」「さうく、禪勝といへば叩大工をしてゐる男がゐますよ。もう五十四五でせうか。その外には心當りもございません。」

「それでは殊によると、それがそうかも知れません。兎に角たよりにしてみせう。」

かうしてわれわれの主人公は見附けられた。取るものもとりにあへず飛んできた禪勝。待ちかねた隆寛は庭に走り降りて出迎へ、互に手を取りあつて再會を歡んだ。舊い友情の想出に泪さへ浮べあつて。そして、それからそれへと昔のこと、別れて後の都のことなどが語られるのであつた。就中、師の御坊の配流、遷化、死後の迫害等に就ての隆寛の話は、並いる人々の心にさへ泪をそそつた。

やがて隆寛は、容を改めて、舊い同志に向つて言つた。

「貴方にお目にかかつて、亡くなられた上人から前に伺つたお言葉を思ひ出しました。上人は、禪勝房は自分丈信仰に入り自分丈助ければよいといふやうな人ではない、きつと多くの同信を得て念佛の有難さを宣揚してくれるであらう、と仰せられました。が、今貴方がそのやうなお暮らしをなさつてゐるのを見ると残念に思ひます。」

禪勝はハツとした。闇から明るみに、つきとばされた思ひだつた。さうだ、自分の態度は卑怯な利己主義に陥つてゐたのだ。凡

てのものをとの如來の慈悲が本當に感じられてゐなかつたのだ。彼は落涙して自分の足りなさを隆寛に悔ひた。

いま、別れの時が來た。隆寛の弟子たちは自分たちへの別れの言葉を禪勝に乞うた。強ての言葉なので、「氣をつけて、みんな、お念佛をいつも稱へる癖をつけて、往生しなさい。」とさとするのであつた。お念佛の申せるやうに。自分だけでなく、人たちにもこの生き方、この心構へが、本當の人間の歩み方であると、分つていただくべきであつた！

その晩年

再び寺に歸つた禪勝の晩年は平和であつた。

自分の後に直つた勝脱律師の後をついだ法觀(龜山帝文永七年AD1270二月十五日寂)も若い時法然上人から日課念佛を授つたことがあつて、禪勝に仕へて大の念佛行者となつた。そして禪勝をたすけて、金田から二里近く下つた山梨の近くの宇刈村春岡の邊に一寺を建立してくれた。いまでもその林光寺(舊くは輪光寺とも書かれてゐる)には法觀作と傳へられる開山禪勝上人像が存する。同信たちも訪ねて來てくれたり、遠方からたよりをくれたりするものも多かつた。『決答疑問鈔』にも在阿から八十二の老禪勝に宛てて疑念を質した手紙をくれたことが見える。

「此の二三年の頃より御渡り候の由、承り及んで朝夕參ず可しと

出で立つ心許りは暇もなく候なり。然れども病者たるに依て參ぜしめず候。疎略に似たりと關も同行の便宜を以て不審に存じ候事共書き進ぜしめ候者なり。

建長七年九月廿五日

總州 在阿彌陀佛 在判

進上

遠江國一宮御領蓮華寺上人御房御禪室

別紙に細々と疑問を書記したものである。此の外『勅傳』には禪勝の法語をも載せてあるがここには略する。

そして御深草帝正嘉二年（AD1358）九月より病床の人となり、益々念佛を高唱して種々の奇瑞を感じつつ十月四日の朝まだき靜かに起て端座合掌し「南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛」と高聲念佛三遍してにつこり微笑み乍ら息を引取つた。年正に八十五歳。まことに立派な大往生であつた。その墓は小さな五輪型のもので、初めは恐らく法觀の墓と並んで竹籬中にあつたが、後に阿彌陀堂の側に移された。いまでも七十四世法觀上人、百十三世宜舜法印と共に蓮華寺の念佛往生の三上人の一人と傳へられて、舊阿彌陀堂跡といはれる小高い丘の上にゆれさやく木蔭になつてかすかに讀める「禪勝上人」の墓文字に一生の信火の名残を止めてゐる。筆者は常行念佛三昧堂を興して引聲念佛を我國に傳へた、この寺の中興慈覺大師を初め、これらの三上人の事蹟を想ひ浮べて、禪宗全勢の此の地方にいまも尙ほ年中行事として「大念佛」がいとなまれ、葬儀の後には念佛衆が必ず鉦をたたいて高聲念佛を稱へる風の

あるのも、さこそと點頭きつつ、この小丘の上に中春のある一日、しばしの感慨に佇んだのであつた。折よくとらへた土地の者の話には小丘の草は無法に刈つてはいけないといつていつも念呪を唱へることを女子供も忘れないといふ。

（四一頁の續き）

また「生きる」と云ふことを單に身體の存続と見るのでは八生の意義をなしません。それでは私達は一刻一刻一日一日死に近づきつゝあるからです。それは「生きる」のではなく「死」に行くものです。だから本當に人生を喜ぶことは出来ません。單に人生を喜ぶばかりでなく、本當の意義ある活潑な元氣なそして明るい仕事がドンドン出来る生活こそ、本當の「生きる」生活だと思ひます。かう云ふ氣持は信仰生活としての自然な現はれ方ですが、これが取りもなほさず、阿彌陀様から生かされて居ると云へる譯であります。

〔X X T 生〕貴殿の御質問可成専門的のものにて當誌には不適當と思ひますので御住所氏名御知らせ下さい。直接御返事申します。（係）

○『家から爲替が届いてね』

○『じゃ、お前に借した五圓返して呉れよ』

○『まあ、あわてずにその夢物語りの終りまで聞いて呉れ』

○『君の家庭じゃ、萬事妻君の主張が通るらしいな』

○『なに半分位ひだ。』

○『じゃ君の主張も半分は通ると云ふのかい』



是から多い

乳兒の「お腹下し」

醫學博士 都築益世

五月と言ふ聲を聞き眼に新緑の鮮さを見る頃になると、「消化不良」に對する警戒をせねばならぬので、極く簡単に思ひついた儘を述べることに致します。勿論單に「消化不良」と言へば、「お腹くだし」ではありませんが、「赤痢疫病」、「腸カタル」等を含む所謂「お腹こわし」の方は今回は述べません。又「消化不良」を全體に涉つて秩序よく述べる丈の豫定頁もありませんので、思ひついた丈を書きます。

御存知の如く乳兒を育て、行くには母親又は乳母の乳で以てする天然榮養と、牛乳又は粉乳等で以てする人工榮養と、母親の乳の不足を牛乳粉乳等で補ふ混合榮養と言ふ大體三通のやり方がありますが、單に「消化不良」と言つても、その各に治療養護の點に著しい相異がありますので、榮養方法の相異に従つて別々に話さねばなりません。そこで人工榮養と天然榮養とに大別して話すことに致しますが、所謂人工榮養の場合は、その養護の上に容易ならぬ綿密な注意が必要で、「消化不良」も極く輕度の場合はいざ知らず、到底御家庭の所謂「素人療法」では治し得るものでないと思ひますし、姑息な手段を弄してゐるうちに、病狀が次第に悪化し遂に醫師も治し得ぬやうな場合に墮ちることが随分あるのであります。ですから人工榮養で子供

を育てるやうな場合に若し「消化不良」が起つたら是非共速に専門醫を訪ねて相談を受けられることを先づ御注意して置きます。是は往々にして「消化不良」は單なる「腹下し」位に考へて輕視した爲思ひ掛けぬ不幸を目撃させられる我々の切なる希望なのであります。

是に反して天然榮養の「消化不良」は一般に人工榮養のそれに較べて、比較的重態になる場合が少く、又容易に治り得るものです。が「乳兒脚氣」と言ひやうな病氣を看過するやうな事もあり、又殊に我國では所謂「離乳期」の消化不良と言ひやうな病狀が随分多いものですから、御注意願つて置きます。

さて「消化不良」と申しますと、一般に「腹こわし」と思ひ、便（通じ）の回數が多く顆粒（つぶつぶ）粘液（ねばねば）が難り、甘酸っぱい強い臭氣があり、水っぽく、青つばくなつてくるものですが、單に消化不良が胃腸の所謂「消化器管だけ」の病氣であるうちはよいとして、實は往々にして「體質」に原

因して、全身病の一つの表示となつてゐるところが往々にしてであります。

そこで健康な、即ちよい便と言ふのはどう言うものであるかと言ふことを話し乍ら、私のお話を進めて行きたいと思ひます。

先づ生れて間もなく、赤ちゃんは青黒い匂ひの淡い粘つこい便をしますが、是は胎便俗に「ねこばば」と言つて、生理的なもの、即ち當前のものであつて、今日では殊に「マクリ」等を用ゐてくださなくてもよいことになつて居ります。その後次第に母親（乳母）の乳で養はれてゐると、その子の便は卵黄色で軟膏様（軟い練薬位の硬さ）で、匂は弱く、一日二―五回、後に一日一―三回位排泄されるものです。この際排泄便後暫くしてから便が緑色（青く）なることがあります、それは心配の要らぬことです。又時に軽い「消化不良」のやうな便の出ることもありますが、一日六回位迄の排便で、しかも子供が丸々とよく肥えて、體重（目方）もどんどん多くなるやうでしたら、それも心配無用なの

です。しかし體重の増し方が十分でないやうな場合、見掛けが肥つてゐるやうに見えても、所謂「滲出性體質」の子供であつて、本當に丈夫でないと言ふより、病氣にもろい子



供、又病氣にかゝり易い子供だ。警戒して居らねばなりません。又同様に體重の増加も思はしからず、夜分の寝付も悪く、泣き聲が嘎て、凝つた乳を吐き、機嫌がいつも悪いやうな徴候があつたら、一應は「乳兒脚氣」を心配して、醫師に診せる必要があります。殊に「乳兒脚氣」の診断が赤ちゃんにはつきり言へる際、その母親には殆んど「脚氣」の自覺症狀がなく、うつかりしてゐて全く取りかへ

しのつかない悲惨事を起すことが間々あります。それから母子共に脚氣に犯される時でも、存外親が極く輕度なのに、子供の方丈は重態と言ふ皮肉な現象は随分多いものですから、御注意願つて置きます。

次に所謂「離乳期消化不良」と言ふか「腸炎」と言ふか、兎に角「乳離れ時の腹こわし」を起すことは天然榮養の場合に相當多いものです。是は母親の義務として、「離乳期の食餌」に就て今一層の御留意を願ひたいと思ひます。殊に是から夏場にかけて、「御飯」を食べさせることに就ては特に十分な警戒を拂つて頂きたいと思ひます。ですが、實際育児（子供を育てること）は並々ならぬ努力とは思ひますが、餘りに母親が神経質になつて了ふことも亦決して子供によい影響を與へぬと言ふ一つの證據として、神経質な母親の乳を飲む子供の便が結構なよい便をせぬと言ふ事實もありますし、殊に母親が心配の餘り大事をとつて、着物の着せ過ぎから、水分や熱の放散を妨げて「消化不良」を起させるやうな

こともあります。勿論子供の體質が「消化不良」を起し易いやうな場合もありますが、母親に下痢があつたり、異常（月經、妊娠等）によつても、子供に「下痢」が起つて來ます。薄着に失して感冒を引かせぬやう、厚着や飲み過ぎに失せぬやう、それから又「離乳期」に近づいて母親の乳ばかりを與へぬやう又乳不足をその儘つゞけぬやう、種々の配慮がないと、母乳で育つ子供には「消化不良」の一徴候たる「下痢」が起つて參ります。

梅雨の心得帖

靴のお手入れ

濡れた靴を天日に乾すのは愚の骨頂です。皮を固くせずに濡れをとるには粗穀を用ふるがよろしい。濡れた靴の中に粗穀をぎつしり詰めて置けば、一晩で濡りはすつかり除れます。粗穀は天日に乾して置けば何度でも使へます。

また靴のよごれは、揮發油などで洗ひ落とす。皮を硬化させますから、牛乳で洗ふの

次に「人工營養」の場合の、よい（健康）便と言ふのは淡黄で、匂が浅く、雜物なく、天然營養のそれより稍硬い便で、一日一二回位出るものです。是の際は必ず淡黄色でないといけません。青つぽくなつたら既に病氣と考へて頂き治療せねばなりません。殊に全身症狀として不元氣で、輕熱あり（熱つばい）目方がどんと減る爲瘦せが目立つやうだつたり、吐乳が有るやうだつたら、最早一刻も猶豫出來ぬ重態と思はねばなりません。勿論體

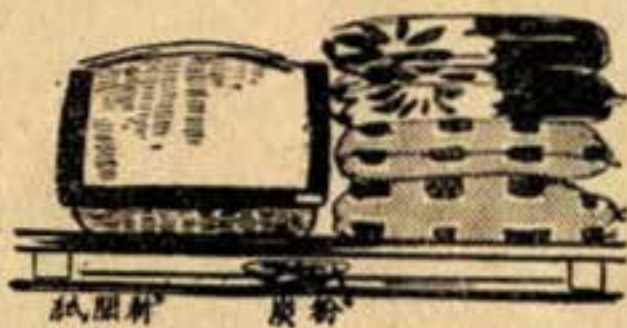
が一番です。毎朝配達される牛乳 少し取つておいて、ブラッシュにつけて軽く洗ふと垢は溶解されて綺麗に落ち、おまけに牛乳に含まれてた脂肪分は皮を程よく軟かにします。そこで乾くのを待ち、クリームでよく磨くと大そうよく艶が出る上に靴の耐久法ともなります。

押入の濕氣よけ

押入の濕氣は不愉快なものです。これを防ぐにはまづ新聞紙を隙間なく敷き、太さ

質的にも異常も有りませうが、かうなつて了つてからだたとへ入院治療しても助かるかどうか問題なのです。是が非でも「人工營養」で子供を育てねばならぬ際には、必ず小兒科醫と相談し乍らやつて行つて頂きたいと思ひます。さうでないといふ殊に夏期に向つて行きますと、全く燈臺の光を見ずに荒海を航行しようとする船よりもつと心もとないやうに私には考へられます。

（おはり）

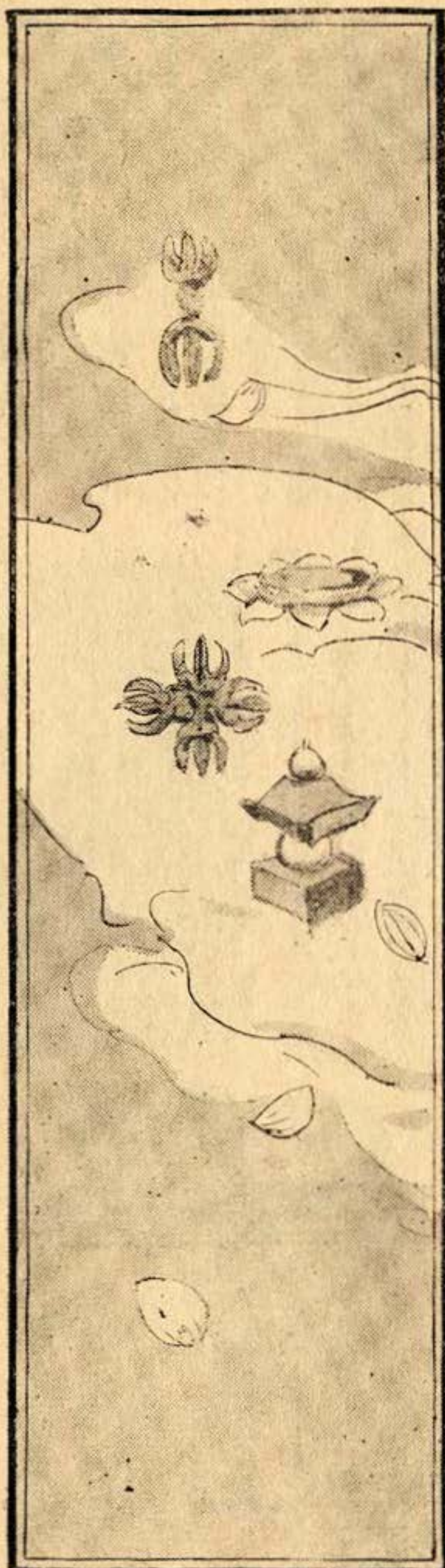


新聞紙

炭粉

一寸五分位の木を臺にして、その上に板を渡し蒲團や行李を入れます。炭の粉をお皿に入れておけば、どんなじめ／＼した時でも、濕氣を呼ぶことがありません。尚粉炭は時々換へることが必要です。

また臺所の戸棚などはこの粉炭を皿に入れて隔へおくだけで、濕氣は充分防げます。



黑谷源空上人傳 (第一回)

佐藤春夫

はしがき

本稿は聖覺法印の記と傳へられて世に十六門記と稱せられてゐる最古の法然傳（源空上人私日記は別として）の蒼古雄健な獨特の文章を現代の讀者に親しみやすくするために書き直してみただけのものである。従つて十六門記が果して聖覺の手になつたものか、さては史的文獻としてどこまでを尊重すべきかなどを論ずるのは筆者の任ではない。ただところど

ころに自分のための備忘を附記して置いた。識者の目ざはりにならねば幸である。筆者は法然上人傳の大意を廣く世人に知らせるに適當なるものと信じて之を擇んだ。文中所々にある翻註は原註であり、○内のものは筆者がさかしの補筆である。本來さう長いものではないが筆者の都合上五六回位に分載することになりさうである。

安居院沙門釋聖覺記

さて、われら生きとし生けるもののふしだらはきりもはてもありませぬから、佛たちが濟度も數限りもありません。それだのに迷ひ切つたわれらの罪業は甚だ重く、過去の一二にとどまらぬ如來たちの教化にも、もはや漏れて來てしまつた。現在十方の諸佛の御利益にさへも尙妨げられてゐる。今末法の濁世に人間の身を受けては來たけれども、釋尊の遺しおかれた御法に遭つて幸に聖教を聞くことが出来る。聖教の種數はさまざまで、その修行の仕方もそれぞれに區別がある。けれどもその荒ましを言つて見ようならば唯二種類になる。その一は聖道門である。唯自力を勵まして、穢の多い現世にあつて佛道を成し就げんとするものである。しかしここは悪い縁が多いところだから、十進んだものが九つまでは退く。それ故この聖道門を難行

道と名づける。その二は淨土門である。仰で佛の願を信じ、佛の名號を唱へて、淨土に往き生れて、早速確實に佛果を獲得する。彼の淨土の國はさすがに善緣が多いから、進のみがあつて退はない。それ故この淨土門のことを易行道と名づける。一體聖道門の方は佛の出現に近い正法像法の兩時代にあつてさへも難行であつた。まして末法の今日の時代は申すまでもない。それ故に愚癡に迷ひ亂れた凡下の者どもは、聖道の門に依つて修行することが出来ない。淨土の法の方は末法の濁世でも、同じく行じ易い。上代の世は尙更申すまでもない。それ故に五逆謗法の惡人でも、善人同様に往生し得た。つくづくこの道理を考へてみるに、その憑りどころは古くからあつたものである。それにしてもどんな善因のおかげで我等はこの法に遇ふことが出

來たか。往生は最も容易く、佛果を得ることは一段と速い。歡喜身に餘り、感涙の忍難い程である。一たい此事實は誰方の御恩徳であらうか。これぞ偏に先師源空上人の慈しみ深き訓の賜物である。報じても報じ切れない。感謝しても盡し足るところのない者である。そこで恩を報じ徳に謝する爲めに、上人が衆生をこの道に勸進教化された事の始末を記す。慈悲の御恩を仰いで淺はかな言葉を恥ぢてゐる。後世の讀者よ幸に誹謗することなかれ。時に安貞元年丁亥極月上旬の候爾か云ふ。

——と、この一節は原文記者聖覺法印の序文とも見るべきものであらう。ただ史家がこの安貞元年極月上旬といふ日附を疑



問としてゐるのを見た事があつた。といふのは安貞元年は嘉祿三年十二月十日に急に改元になつた事實を指摘して安貞元年には極月上旬はなく、その年月日は嘉祿三年十二月上旬でなければならぬといふのであつたと覺えてゐる。

右の序文のやうな一節のあとに

謹みて上人の行狀を述ぶ略十六大門なりと漢文で記して上人の御生涯を十六の部門に分けた目次とも見るべきものを掲げて

ゐる。十六門記の稱のある由來がわかる。その十六部門の名は追々と各章のはじめに記入するから、今は煩を避けて略する。

第一 託胎前

後因縁門

(おん母胎

に入り給う
た前後のお
ん事)

釋迦大師が御入
滅の後、二千八十
二年の歳月を経て
大日本國に、人王
七十五代のおん帝
崇徳院の御世に上
人は出世遊ばされ
た。美作の國、久
米の南條稻岡庄の
人である。(稻岡北
の庄板社、現在の久米郡稻岡南村大字井庄(?)誕生寺驛
のあるところであると聞く)父は久米の押領使漆間時國、
母は秦氏の女である。夫婦は年ごろ仕へる子のないのを歎
き悲しんで、佛に願ひ、神に祈つたところがその祈請の功
が積り願望が達して長承元年壬子七月上旬、(西暦一千百
三十二年)妻の夢に剃刀を飲むと見て身ごもつた。夢の事



に誘ひ入れるといふ有難い有兆であらうと語るのであつた

第二 出胎已後利益門

(おん母胎を出で給うて後世
を益し給ふおん事)

を夫時國に語ると
時國は、結構々々、
そなたは男の子を
生むのであらう。
それに剃刀を飲む
と夢に見たといふ
のは、その子が成
長の後出家して道
を學び、佛法の重
要な人物となつ
て、一切の衆生を
教化し世俗の生活
を捨てさせ、佛道

長承二年癸丑（一一三三年）四月七日のきつちりと正午に上人は御誕生遊ばされた。さうして四五歳の頃になつてからは坐るには必ず西に向ひ、もの言ひはじめの口すさみにも南無阿彌陀佛と唱へ給ふたので、親身といはず他人と言はず見る人みな、これを不思議に思はぬものも無かつた。保延七年辛酉の春のころ、時國は夜討のために殺された。その敵は伯耆權守、源長明の子息明石の源内武者所定明であつた。その意趣の原因は定明が稻岡の庄を知行して多年になるのに、時國は下役人の身でありながら定明を輕んじて遂ぞ一度も對面した事がなかつた。その遺恨であるといふ。其夜、九歳の子供が小さな箭をもつて敵を射たところが、定明の目の間に立つた。此疵のために事が顯れると思つて、直ぐさま行方を晦ましてしまつた。事を見聞した者共皆々感心せぬものはなく、人々はこの子供を小箭兒と呼んでゐた。

時國が並々ならぬ疵を蒙つて今はこれまでといふ時に臨んで、九つの子供に向つて遺言をするには、
「自分の亡き後、世間の風儀にならつて仇を恨んではならない。これ等もみな前世の報である。もしこの仇を報ひよ

うとしたならば、いついつの世までも生れ代り生れ代つて相互に敵意を抱き合ひ、この怨があちらこちらに輪回して絶へることがないであらう。命あるものはみな死を悲しむ。この憂ひ悲しみが限りなく延長する。自分はこの疵に痛み苦しむ。他の人がどうしてこれを痛み苦しまぬ筈があらうか。自分は今この命を惜しむ他の人もこれを惜まぬ筈はない。自分の心持で他の思ひもはかり知られる。それだからただ一途に自分をも他人をも同様に濟度することを希望し、怨みや瞋などは残らず消し、他も我も共に悟りに達せんことを心掛けよ」

と言ひ終つて、やをら西に向き直ると、高聲に念佛して眠るが如く命を終へ給うた事であつた。

（尙勅修御傳に因ると兇暴な定明は後に前非を悔ひて一族みな淨土門に歸して奇しき因縁を成就してゐる。）

第三 最初入學佛法門

（はじめて佛門に入りて學な



び給ふおん事)

永治元年七月十日改元 辛酉の歳の暮に、その地の菩提寺の院主觀學得業坊知鏡の弟子となられた。(勅修御傳によればこの人は泰氏の弟で上人には叔父さんに當るわけである。もと延暦寺の學徒であつたが大業の達せられないのを憾んで、南都に轉學して得業となつたものであつた。彼は姉の産んだ孤兒を弟子にとつてみると、性質は極く俊敏、記憶力は確かで決してもの忘れをしない。

第四 離親登山學行門

(膝下をはなれて叡山に登つて學問をし給ふおん事)

觀學は同輩に語つて言うには、この兒の器量は凡人ではない。田舎に埋もれさせて置いてなるものではない。はやく叡山へ登らせるがよいと、そこでこの兒をつれて母のところへ行つてこの事を自分の姉に話すのであつた。(非凡な才を抱いてゐると思ふにつけて自分が昔志を遂げずにし

まつた山へ送つて勉強させて見たいといふのも、さもあるべき心持である。)しかし兒の母はこの話を聞いて子に言ふ。

「そなたを亡き人のかたみとも思ひつめてゐるから程近い菩提寺に置いてさへ遠いと思つてゐる。それに叡山へやれとは、思ひも及ばぬ事です」

と言ふと子供は、

「昔は本師の釋迦尊は御年十九で父の大王にかくれて、こつそり王宮を出て、終に成佛し、限りもない衆生を濟度し給うたものでした。今わたくしは生れて十三になります。母上にお暇をお願い申して法の山に登り、出家し修學して父母の深き御恩に報じ、多くの人々を佛道に誘ひ導き、わが身も皆様をもみ佛の智慧の光に浴びさせて悟りを開いてお目につけませう。どうぞお歎き下さいますな。決して決して恨みにお思ひ下さいますな」

と申すのに、母者人は

「まことに生みの子に訓へられるとはこの事でせう。聞けば、古は釋迦如來がおん母上のために摩耶經とやらをお説き遊ばされたとか。今更思ひ合されて勿體ない事でござ

います。ではございますが何分凡下の淺ましさには恩愛の別れは堪え難うございます—

と涙もしとどであつた。それでも子供は

「また聞きますに、參河守大江定基と申す人は、出家して學問の修業をし、年とつたお母さんのお許しを受けて唐にまで渡り、彼國で圓通大師の號さへ得て、我が國の譽をあげたものでございます。佛も三界に流轉する間は恩愛を斷ち難いものである。恩を棄てて無爲に入るこそ眞實に恩を報ずる者と説いて置かれました。自分も早く四明の山に登つて一乘の妙法を學んで、父上母上お二方の菩提を訪ふことさへ出来ましたならばこれがまことの御恩報じではございませんまいか—

と事をわけての申し分に母者人も道理に従うて涙ながらに暇を許した。觀學得業も母子の問答を聞いてあまりの歡ばしさ有難さに、涙の催されて、申述べる言葉もなく、無言がちで歸つて來た。

終に天養二年丑乙の春。比叡山西塔の北谷の持法房源光の所に送り遣はした。その書狀の文言に、大聖文殊の像一體を進上とあつたので、源光は此の手紙を見て文殊の像を

さがしたが、像は無くて年十二三の小兒が來てゐるばかりであつた。それで源光は早速思ひ當つて、文殊の像とはこの兒をほめたたへたのであらうと、めづらしい事に覺えて、喜んで早速一文を讀ませてみると事もなげにその意味をのこらず悟つたから、源光は自分の如きは短才淺智である。もつと傑出した師匠について深遠な法の理をよく研究させるのがよからうといふので、功德院肥後阿闍梨皇圓の許に送り遣はした。この人は參河權守重亮の嫡男で少納言資隆朝臣の兄、隆寛律師の伯父に當る方で、皇覺法橋の弟子である。當時の名だたる師範で、この山でも賢者哲人であつた。この兒の修學は夜な夜なに積み、才學は日々に磨かれ瑩やいた。人みなその非凡に感じ、山中悉く不思議とした。

(さしる 井上正春)

無量光佛

まよひゆく闇路の末のはてをなみ

はてなくてらす光なるらむ

— 行 誠 上 人 —



綱代笠さんげ

吉田初太郎

「むごい！」

立ちどまると淳行は思はず眼を睜つた。

手から、足から血をしたゝらした瘦せた、髪も髭も蓬々とした男である。垢にそまつたつゞれをまとうた六十近い年ごろで、擔いだ囊に、小石を拾つては入れてゐる。

「あれは何者だ？」

見習興力の淳行は、眼を睜つてきいた。

「御存知ありませんか。石坊主です。」

同心が答へる。

「石坊主……？」

「二十日ほど前から江戸へ流れて來た不思議な坊主です。あのあつめた石で塔を積みます。何かの供養の爲でせう。」

「それにしてもあの血はひどい。」

「あの石で、自分の手や足をあの様にむごく傷けるのです。僧形をしていますますが、唱へるものはたゞ懺悔の言葉だけで、一遍の念佛もきいたも

「のはないとの噂です。」

「可哀さうに……」

淳行は暗い氣持になつた。如何なる罪業の贖ひにか、それでは餘りに己れを苛責しすぎる。この寒空に、あの爲體ではさぞかしこたえることだらう。

朝から薄ら曇つた日であつた。殊に、いま石坊主の歩いて行く河岸は、枯柳まで凍てるかと疑ふばかりに寒々としてゐた。颯々の風に、石坊主の衣の裾が捲れ上つて、細い毛脛が、今にも吹き倒れるばかりに見える。

「寒い。今夜あたりは雪になるかも知れぬな。」

淳行は牙えない聲で、空へ瞳を移した。

「雪は厭で御座います。雪の中の定廻りは、餘り感心しませぬで。」氣持はその同心と同じだつた。たゞ、違ふのは、この若い見習興力は可憐な妻のために雪を厭ふことなのである。

果して、お役引けのかはたれ時近くなつて、冷たい白いものがさらさらと降つてきた。

淳行は、早くも薄ら白く積つた籬の間を通つて、門口で傘の雪をとんとんと拂つた。

玄關に明りが射すと、そこに妻が手燭を置いて、

「おかへりなさいませ。」

と、靜かに兩手を衝いた。

「たゞいま。」

その顔いろを、やさしい瞳で見返へして、淳行は何故かはつとずる。

家の外に、降りつもる雪はあつても、妻のこゝろづくしの夜食は、養母を圍んでたのしかつた。

「今日も、別段の瑕瑾ありませんでしたか？ それは重疊、役向のことは念に念を入れてなさいませよ。」

いつもの通り、養母のうれしい心づかひであつた。それから、外出ぎらひの養母と妻のために一日の見聞を語る淳行のたのしい時間が來るのであつた。

淳行は、晝間見た石坊主の話をした。

「あの痛ましい様子を見ると、罪はつくりたくないものと、しみじみ考へさせられまする。」

「左様です。罪を作つてはいけません。殊にそなたのやうに罪人を窮命する役向のものは、よくよく手落ちのない吟味をしないと、冤罪の人をつくりませう。これは怖ろしい一つの罪です。亡なられたお父上が……」

養母は、こゝで言葉を切つた。

遽かに、部屋うちに寂しい色が、濃くにじみわたるかのやうだつた。一瞬の間に、養父の姿が思ひ浮んだからである。——自分のために冤罪を負つた人に襲はれ、手傷を受けて以來長らく病床に呻吟

して、ついに身罷つた養父だつた。復讐鬼の太刀は、その折、父に抱かれてゐた乳呑子の春世の左の腕をさへ傷つけたのだつた。

「お父上は捕物上手といはれた名輿力でしたが、あのやうな冤罪を人に負はせ身罷るまで、すまないすまないといひくらされました。そなたも、そのやうなことのないやうに、氣をつけてください。」

養母は、かう訓戒した。淳行はしづかに頭をさげた。

若夫婦は、寢所に引下ると、

「大分に今宵はきびしい寒さだが、腕は痛みはせぬか？」

と、やさしくきく淳行であつた。

「いゝえ、別段のことでもございません。」

「今宵は、石坊主の話から、飛んだ古い昔のことを思ひ出させ、氣の毒であつた。父上のお話しはなかつたが、嗟かし、そなたには苦痛であつたらう。いまに、下手人を探しだして、父上やそなたの恨みを晴してみせよう。」

「さやうなことはなされずにくださりませ。父の、くれぐれもの遺言ではござりませぬか。」

「それは知つてゐる。しかし、暑さ寒さの腕の痛みを思ひ遣ると、いたまじさにこの身さへ瘦せる思ひがいたす。この佗しさだけでも下手人をやっつけずにはゐられぬ思ひだ。春世！ そなたには良人のこの心が判つてくれるであらうな。」

淳行が、強い決意でかう云ひ切ると、春世は袖で面を蔽ひ、咽び

泣くのであつた。

月の二十日は、亡父の展墓を缺かさないう夫婦である。この養父は、淳行を三つの年から手鹽にかけて養育してくれた大恩人であつた。臨終の枕元で、まだ十五を過ぎなかつた淳行と春世とに假祝言をさせ、大喜びで大往生を遂げたといふ人であつた。

一月振に會ふ住職もなつかしかつた。庭に射す日ざしの明るさ。梢の上の青空。鶯の啼聲も落着いてきこえた。

「門前で、怪しいものにお會ひではございませんでしたか？」

ふと、いふ住職の言葉に、若い夫婦は不審さうに顔を見合せた。

「いゝや會ひません。何か御門前に？」

「まだお會ひでない。では、今日はいつもとより遅れたと見えます。いや、そのことに就て、御了解を得たいことがあります。こちらへお出でください。」

住職は立上ると庫裡を出て、墓地の方へ二人を導いて行つた。建て示されたのは、父の墓前に、小高く積まれた小石であつた。

「幾ら、取除いてもあとからあとから積上げます。いつも門前に來て妙なことを口走る男が、これを積むのです。白痴とも狂人とも覺えませぬ、身に僧衣をまとうてゐますが、念佛を唱ふるのを一度もきいたことがありません。あれこそ生きながら鬼と化した男でせうか。」

「石坊主……」

淳行は、思はず口走つた。

「おゝ、それぞれ——その石坊主とかいふ男の所業です。衲が幾度となく仔細を語れと申しても、すこしも口を開きません。」

住職の氣疎くいふ言葉である。

それからであつた。春世の顔が、憂ひに凋むばかりに蒼白く見え
てきたのは。

「何うした、顔のいろがよくないやうだが——」。

本堂を出た明るい日ざしのもとで、初めて氣づく淳行であつた。

寺門を出ようとする、かたはらの礎石の上で、坐しながら、自分の指を、片手の石でこつこつ潰してゐる無法者があつた。

「如此愚人、以惡業故 應墮惡道 經歷多劫 受苦無窮」

石坊主である。觀經のこの一節だけを、くりかへしくりかへし唱へながら、己れの指を一心に碎かうとしてゐる。

「待て——」

淳行は、その腕をぐつと握んだ。振仰いだ相手の瞳には、何んの翳もなかつた。蒼窮のやうにからりとしてゐた。

「そなたの所業か？ 陶家の墓前に石を積むのは？」

「愚僧でござる。してお身たちは？」

相手は、夫婦の顔を交々に眺めた。

「陶のものだ。」

淳行は、いふと同時に、石坊主の顔に、劇しい感情の流れるのを見た。

「すると、そこな奥方は？」

「陶の娘だ。」

「げつ！」

石坊主は、思はず叫んだが、すぐに、

「嘘だ。陶の娘は死んだ筈だ。父とともに——人手にかゝつて！」と、反撥させる語氣だつた。

「そ、その下手人が、そちだといふのだな？」

「如何にも衲だ……」

「何ッ！」

淳行は、力一杯に相手を蹴つた。石坊主は他愛もなくふらふらと枯木のやうに倒れた。が、起上ると、寄らば斬らうと欄に手をかける淳行の姿に驚きもせず歩み返へして来る。

「陶には、忤は無いつきいたが、貴公は？」

「婿といつたら、逃げる覺悟か。逃がしはせぬぞ。」

「手にかけて父娘のために供養の石を積上げて二十年、陸奥から筑紫の果てまで遍歴して來た衲ぢや。生きた屍ぢや。陶の養子の手にかゝらば思はぬ死花と申すもの、さ、存分にお斬り下さい。」

「違ひます、違ひます！」

春世の聲が、寂然として石坊主の心を撼るがせた。眼を開けると、袖を惜氣もなく捲りあげた美しい人の二の腕に、生々とする太刀傷である。

「や、これは!!」

「お坊さま! 殺したと思召される娘はこゝに生きてをります。何をあなたに背責されます。父の身罷つたのも病死です。月こそ違へ七年前の今日でした。」

石坊主の瞳が、呆然と睜られたのも束の間であつた。その臉に水つばいものが嵩むと見る間に、途切れ途切れの嗚咽が、喉もとを漏れるのであつた。

「行け、今日は亡父の命日故、ゆるすと致すが、明日からは出合ひ次第、召捕つてくれるぞ。」

「お召捕結構です。明日、この門前にお出向き下さい。必ずお待ちいたします。」

石坊主は、澄みわたつた眼で、しづかに淳行を見成るのである。……

(明日になるといふ。早く、明日になるといふ!)

今宵一夜の容赦さへ、年若い淳行には苦になる面持だつた。長いあひだひたすら探してゐた男である。亡父にも妻にも瀕死の手傷を負はせた男である。いまとなつては、一度哀れをかんじたことさへ

腹立たしかつた。

翌朝、身仕度して、養母の部屋に挨拶に行くと、行きがけに、中島六郎兵衛宛の手紙を託かつた。

中島六郎兵衛は亡父との親友で、上席の輿力であつた。

玄關を訪ふと、六郎兵衛自身が折よく、ひよつこりと顔を出した。

「御隠居からの御手紙? 珍らしいこともあるものだな。どれどれ、拜見いたさう。」

六尺ゆたかの大兵で、頬も顎も圓々と、愉しげで、微塵、老いを見せない人だつた。淳行は、この人を小父上と呼んでゐた。

「小父上、では拙者はお暇申します。」

「あゝ待て——」

手紙から、眼を離すとあわてゝいつた。素早く、巻きおさめて懷中にすると、「ちと、悠つくりとせい。なに、役所のことは何うにでもなる。ついでのことだ。返事を持参してくれぬか。手間は取らせぬ。はゝゝゝゝ。老人は氣が短うてな。思ひ立つたら短兵急ぢや——」

六郎兵衛は振返へると大聲に呼ぶ。

「奥や、陶の忤だ。ちと用がある。座敷へ通してくれ。」

淳行は小母につれられて奥座敷へ通る外は無かつた。

しかし、座敷へ通ると、何んの、氣が短い? ……と、淳行は寧ろ

ろ氣の長さに呆れてしまった。老人は、悠々と筆の講釋、硯の自慢で、手紙を書出す氣配は一向にないのである。

(小父上もよい人だが、今日に限つて氣が利かぬ。しかし)と淳行

は、いらいらしながらも考へる。

(獲ものは

こつちのも

のだ。あせ

る必要は無

い。)

手紙を手

渡されて、

小父の邸外

に出たのは

一時ほど經

つてからで

あつた。淳

行は、檻を

放たれた虎

のやうに氣

を傲らせて歩いた。

菩提寺の築地は、谷中の寺町の閑寂な廊うち、向ひ合つた寺門と樹立の果に、灰白く浮上つてゐた。

築地は見えながらも、小路を突當るまで寺門の見えぬのが淳行にはもどかしかつた。やつと、明るい通りに出外れて振向くと、寺門の前には、住職と寺男と、外に二三の男女があるばかりで、肝腎の石坊主の姿は無かつた。

(石坊主奴、拙者を騙したな!)

憤怒に燃立つたまゝに、住職への一禮ももどかしく、

「石坊主奴は如何しました。まだ見えませぬか?」

と、聲さへ殺氣を含んでゐた。

「遅うございました。」

「遅い?」

「たつたいま、門前で石坊主は見知らぬ篤籠に拐はれました。」

「拐はれた?……」

「厭がるものを手取り足取りして、篤籠に押込め、遮二無二擔いで

逃げ去りました。何んたることかと、いまでもこの人たちと話してゐ

たところです。」

「理不盡なッ。」

誰が、石坊主を拐つて逃げたのか。怨恨か、物取りか、皆目あたりがつかない淳行は、道をかへるのも沈みがちとなつた。



「陶、どこへ行く？」

ふと前に射した黒い影である。聲をかけられて振仰ぐと、小父御の六郎兵衛だつた。

「なにを考へながら歩いてゐる。何うだ、わしと一緒に來ないか、功德になるぞ。」

「どちらまで？」

「すぐ上の無縁佛だ。」

六郎兵衛が顔をしやくつたのは、自分がいま下りて來た上野の杜の方だつた。

「歩きながら、その哀れな無縁佛の話しをしよう。ききなさい——わしが、まだ二十年も若い折のことだつた。勿論、陶の先考も存命だつた。人殺しがゐた。身分のある旗本がその下手人だつた。罪が判ると、その旗本の若い奥方が自害をされた。無縁の佛はこの方なのだ。可哀さうになう。檢死に行くとその奥方の死體に取纏つて泣きしきる男の子があつた。ところがその旗本が間もなく冤罪と知れてゆるされて邸へかへるとそのていたらくちや。くわつと逆上して自分を調べた與力の家へ斬込んで、そのまゝ江戸を逐電したのだ。何うした陶——顔いろがよくないぞ。」

「大丈夫です！ 小父上、そ、それから！」

「陶！」

六郎兵衛のちいつと瞋る眼は潤んでゐた。

「しつかりせい！ 伴に、與力と娘の手傷は輕かつた。與力はせめてもの罪ほろぼしにその孤兒を引取つて養子としてお上へお届けいたした。……」

「小父上——」

死のやうな淳行の顔であつた。

「陶、過ぎたことにはこだわるまい。よいか、久遠の時に滌はれ、ば淨穢も一如、恩讐、愛憎又二つない。陶家の佛はよい跡取を得て瞑目してゐる。判つたな。——おゝ早いものだ。無縁の佛のある寺の坂下に來た。」

見上げると、坂の上に養母と妻とが一人の旅装の僧侶と、懇ろに別離を惜むでゐた。

その僧侶の姿こそ、淳行には見覚えのあるものであつた。六郎兵衛と淳行とは、坂の途中で行きちがつた。

右に避けるのを右に、左に避けるのを左に、淳行は寂しいこゝろで立ちふさがつた。衣こそ、袈裟こそ變はれ、紛れもない石坊主であつた。綱代の笠をあげて、しみじみと淳行を見る眼は涙に光つてゐた。二人は互ひの潤ふ瞳を見交はした。寂しく、愛憐の光が、そこにたゞえられてゐるのを、父も子も明瞭に認め合つた。

その瞬間、石坊主の口を漏れたのは、

「如此愚人 以惡業故 應墮惡道 經歷多劫 受苦無窮」

の口誦であつた。

「御僧、しばらく——」

行過ぎようとするのを淳行は止めた。

「失禮ながら、旅立の鹽 仕ります。お受けくださいませうか？」

「何んなりとも！」

石坊主の答へを追ふて淳行は、爽やかな聲でいつた。

「汝若不能念者 應稱無量壽佛 如是至心 令聲不

絶 具足十念 稱南無阿彌陀佛 稱佛名 故於念念中

除八十億劫 生死之罪 命終之時 見金蓮華 猶如日輪

住其人前 如一念頃 即得往生 極樂世界」

きゝ終ると、石坊主は兩手で眼を蔽つた。わつと、嬉し泣きに聲

を立てゝ一散に、坂を駈下りて行つた。と、やがて坂下から、

「南無阿彌陀佛!!」

凜々しい石坊主の稱名がきこえた。

「おゝきこえた。あれこそ二十年振の口誦であらう——」

六郎兵衛の喜ばし氣な聲であつた。そして、寂しく坂下を見下ろ

す淳行にいふのであつた。

「喜べ! あれで、あれであの方も成佛せられる。」

(をはり)

綜合教化大會の決議にも青年聯盟結成
大會の決議にも祖師の御影を集會毎に
掲げることになつた點からでも是非こ
の勢至丸さま繪像を御採用あれ。決し
て失望することはありません。今直ぐ
御注文下さい。

福田聿水畫伯筆

勢至丸々々々々

十三度刷極彩版

四六版四ツ切全面

假巻付送料共

一枚 五十 錢

前金御申込を乞ふ。是非とも!

外に童話豆本百冊壹圓五十種

見本付十錢御封入を

京都市烏丸鞍馬口下ル

中外書房日校部

振替大阪七八七七〇番
電話西陣一七七三番

一枚起請文講義 (二)

中村 辨 康

(四) 講 義

(ハ) 阿彌陀佛への歸投

凡そ人生の謎を解かうとして求道の旅に出づるものが、誰でも経験するところのものは、如何にすれば信仰に入り得るかと言ふことである。

「入信し得たり」とハッキリ自分の胸に納得したいことである。

佛教に依れば道は二つである。

(一) 心は清め言葉は清め身體を清めて、日常生活を聖者の如く行ひすまじ、雑念を沈め妄念を止めて端心正意となし、深禪定に入つて、眞實なるものの本體を探り、正慧を悟つて佛菩薩に均しい生活と心境とを得ることである。

他の一つの道は前の如き修養は餘程の強い意志力の所有者で、しかも生活上の苦勞もなく、時間の餘裕のある者でなくては出来ないことであり、且つ多少とも佛教に對する基礎的な素養がないと非常に困難な修行であるから、一般の人々に適應しないので、全然さうした方面と趣きを異にした信仰に依て、先づ我々の持つ精神の中核を破

(一) 貪欲瞋恚愚痴の煩惱を斷盡すること

(二) 妄語、綺語、惡口、兩舌の四をつゝしむこと

(三) 殺生、偷盜、邪淫の三行爲をなさざる

(四) 心境を正しくすること

(五) 深い精神統一の状態

(六) 眞實なる悟りの智慧

(七)凡ての現象は種々なる縁(條件)の集合和合に起るものであるが、其内最も強い條件を増上縁と云ふのである。

り、絶大なる強い増上縁力にすがつて、其導きから我が本心の納得し行く「救ひ」を確認せんとすることである。

此故に私達一般人の要求するものは、第二の「信仰に入る」と云ふ道より外には考へられないが、今更此信仰に入るにはどうすればよいかと問題になつて居るのである。

いま假りに信仰の状態を三つに分けて見る。解信と證信と仰信とである。

「解信」とは信の内容をよく理解して信ずると云ふことであるが、然し之は非常にむづかしいことで、理解が出来たところで餘程の反省力がない限り果して信仰に入り得るか何うかは判らない。若しざつと理解した丈で誰でも信仰に入り得るならば、概念丈でもよい筈である。つまり教義を知ればそれでよいのだから、學者は誰よりも信仰深い人であるべきである。

さればと云つて、理解に馴らされて居る現代人にとつては何の理解もなく、唯だ仰いで信ずると云ふ譯には行きかねる。して見れば矢張り一應の理解は必要とされるものとも云ひ得られる。

然し乍ら「解」と云ふことも、佛教では「勝解」とか「體解」とか云ふ言葉で示されてあるやうに、普通に云ふ理解とも違つて、一種の體驗を意味して居る點もあるのである。

- (一) 一心に念佛して居ると何時しか心が統一されて念佛丈になる、其時佛を心に眼に體驗的に覺認する、之を見佛三昧と云ふ
- (二) 如來にあくがれること
- (三) 因は原因、縁は其因を發達せしむる條件
- (四) 佛心とは大悲悲のこと
- (五) 光明の相又は淨土の莊嚴されたる相

もしそれが體驗を意味するとすれば、次に云ふ「證信」と同類のものになる。

「證信」とはシカと信の確證を體驗したことである。或は見佛三昧を得て確認した信である。と云ふ人もあるが、必ずしも見佛三昧ばかりが確認ではない。中には怪しげな迷信的な見佛もあるからである。一般的には深い自己省察の後に起る皈依渴仰の心の如き、實にあざやかにハッキリした一つの宗教經驗である。また「見佛」と云ふ意味も木佛金佛に似た形像を拜んだと云ふこと丈では、さう大した意味をなさない。唯だそれらの因縁に依て、シミジミと如來の大慈悲を感得するところに、其價值もあらうと考へられるから、謂ゆる佛心を見ざる見佛は本當の見佛ではない。或は明相を見、或は瑞相を感ずることも、其處に眞實なる信仰を得なければ本當の意義をなさないのである。

だから何かの形に於て宗教的な精神轉換が行はれたものは、皆な「證信」と云ふ事が出来やう。此意味から云ふと本當の信仰を得て居る人は皆な何かの意味に於て「證信」である譯でもある。

然し「解信」や「證信」やが、或は如來の大なる慈悲を喜び、或は本願の意味を領解したものであるとしても、それはホンの一部に過ぎなく、甚深廣大な悲願の全部に徹底することは到底出来得ないのだから、深く探れば探ぐる程、領解すれば領解する程信ずれば信ずる程、愈益其深きに驚き、其廣大さに氣付いて、謂ゆる仰いで信ず

- (六)「どうぞ」とす
 がる心持ち
 を顯はした言
- (七)殺生、偷盜、
 邪淫、妄語、惡
 口、兩舌、綺
 語、貪欲、瞋恚
 愚痴の十惡
- (八)父を殺し、母
 を殺し、羅漢
 を殺し、佛身
 より血を出
 し、和合團體
 を亂すの五惡
- (九)人間の事
 (一〇)三聲五聲の念
 佛
- (二)根本的な願ひ

る「仰信」の人とならざるを得ないのである。

此故に「仰信」こそ信の最初であると共に、信の最後である。然かも「證」と「解」とは相伴なつて「信」を進ましめて行くものでもある。

今私達が阿彌陀佛へ歸投して「南無」の心を致すのも「仰信」があればこそで、若し私達の心に仰信する處がなければ「南無」の心境は起らないし「解」そのものも本物には成り得まい。

此意味から云ふと「解信」も「證信」も均しく「仰信」に落着き、唯だひたすらに仰ぎまかせる歸投心が根柢となるのである。

法然上人の法語の俗に「小消息」と云はれる、伊勢の黒田の上人に送られた消息に、「十方に淨土多けれど西方を願ふは十惡五逆の衆生の生るゝ故なり。諸佛の中に彌陀に歸し奉るは三念五念に至る迄自ら來迎し給ふ故なり。諸行の中に念佛を用ゆるはかの佛の本願なる故なり。云云」

と云はれて居るのも、阿彌陀佛こそ自分達に最も親近せる如來で、此如來の本願なしには自分達は絶対に救はるべくもないと、見定められたからである。

十方の中に西方を選び、諸佛の中に阿彌陀佛を選び、諸行の中に念佛の一行を選び取ると云ふ三重の選擇は、信仰體驗の事實が、飽くまでも純粹なるものへ純粹なるものへと深く深く探ね入つたからであると共に、此の最も純粹なるものこそ、何のはか

(一) 禮讃作觀回 禮拜數願察門門門門門
(二) 雜行正行 助業正業

らひも何の理窟もなき純一の極に達したもので、其處には唯だ「仰信」があるばかりではないかと云ふことを物語るものである。

(二) 信仰への行爲

「小消息」に於ては、信仰の世界と、信仰の對象と、信仰の實踐との三重の選擇をして居るが、此「一枚起請文」では、信仰の實踐行たる念佛に就て、先づ初めに三重の分別をして居るのである。

即ち

觀念の念佛でないこと。

念と云ふ譯を學び知つてからの念佛でないこと。

唯だ「南無阿彌陀佛」と本氣で申せば必ず救はれると信じて申す念佛で、それ以外の念佛であつてはならないこと。

この三つの分別は、念佛の念に就て、觀念と理念と信念との三つを擧げ、淨土教に云ふ念佛の念は正しく信念の上の念であり、且つその信念のほどばしりは「南無阿彌陀佛」と必ず聲に出る處のものであることをハッキリ示されたのである。

之を昔の人は「無觀無解但信稱名」とも云つて居る。

一體淨土教に説く「行」は「五念門」とか「五種正行」とか云ふものを擧げて、正

雜助正の分け方をして居るのであるが、五念門の方は聖道門的な匂ひがかなり強いから餘り並べる必要もないと思ふ。然し支那に於ける淨土教の大成者たる善導大師は信仰上の行爲を五種の正行として



天親菩薩の五念門を開合して居るが、此五種正行の方が私達には分り易い。但し一切の善き行ひを雜行として捨てゝ居るのは、一般通念の上では「いくら信仰を要求するにしても、人間生活をなす以上、道德的行爲を廢捨せんとするは甚だ不都合ではないか」と云ふ疑問も湧かうかと思はれる。然しいま此處で云つて居る中心問題は信仰に入る爲めの行爲、若しくは信仰培養の爲の行爲に限つて居り、信仰的の純粹な行爲を規定して居るので生活上の規定ではない。随つて人間として道德行爲を捨て去れと云ふのでないことは明かである。

だから法然上人は「小消息」の中に

「罪は十惡五逆のものも生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」

と云はれて居る。

五種の正行を簡単に説明して見ると、

第一の「讀誦正行」は淨土の三部經と云はれる無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經などを讀み又は誦することである。之は淨土教の根本聖典で此三部經なくしては淨土教は生れ出ないからであり、淨土教の教義信條が悉く此中に納まつて居るからである。然し之は文字一つも知らぬ人には無理であり、且つ多少なりとも佛教の術語を知らぬ人には理解しにくい言葉も澤山あるから、一般人に通ずることはどうかと思ふ。だから之をもつと廣い意味に取つて信仰的な御話を聞き、若しくは信仰書を読むことに適用して見たいと思ふ。

第二の觀察正行は淨土又は阿彌陀佛を觀察すること、即ち精神統一の上になす觀法であり坐禪である。觀無量壽經にある日想觀、水想觀乃至佛身觀等の十三觀法などがそれである。之は中々通常の人には出來得ないことで、法然上人も

「觀法と云ふことも、元はやつて見たことはあるが、運慶湛慶の作つた佛像程にも及ばないのだから、今は止めてしまつた」

と云ふやうな意味のことを云つて居られ、むしろかうした觀法とか精神統一とか云

- (一) 理觀、事觀等の別あり
- (二) 扶坐して心を統一せしむること
- (三) 有名な佛像彫刻師

(四) 種々雑多な
心の起ること

(五) 煩惱心の起
ること

(六) おすがたの正
しくおごそか
なこと

ふやうな條件を斥けられ、随て此の一枚起請文にも、のつけからハツキリ「觀念の念」でないことをことはつて居られるのである。

また色々な人々から

「雜念や妄念を取り去つて一生懸命に念佛したいのですが、それは何うすればよろしう御座いませうか」

との質問に對して、何時でも、

「雜念が起るにつけても、妄念が起るにつけても、かゝるものが救はるゝと信じて稱名念佛すればよい。私達人間から雜念妄念を取去らうとするのは、丁度私達の顔から眼鼻を取れと云ふのに均しいものです。」

と答へられて居るのを見ても分るのである。

然し相好端嚴な畫像なり御木像なりを拜んで、敬虔な氣持になることは決して悪い事ではなく念佛の助けになるものである。

第三の禮拜正行は阿彌陀佛の前にぬかづくことであるが、之は一面に敬虔な氣持が助長されると同時に、他面に「俺が」と云ふ高慢な心が折れ、懺悔と反省とが滲々としてにぢみ出るところの行爲である。同じ念佛申すにも胡坐をかいたり、横尻をしたり、ふんぞりかへつたりしたとて、本當の欣求心から出る念佛ならば、一向差支へないのだけれども、少くとも信仰に入らうとし、若しくは信仰の増進を圖らうとする者

には、やはり禮拜恭敬の氣持を以てするのが妥當である。

第四の稱名正行は此五種の正行の中の最も純粹なるもので、法然上人の主張せらるる念佛が之である。此念佛は眞面目な心で佛の本願を素直に信じ、佛の御名を呼べば必ず救はれると深く心に思ひ定めて

「助け給へ阿彌陀ほとけよ」

と申す「南無阿彌陀佛」のことである。

之はあとでもつと委しく申し上げる機會があらうと思つて居る。

第五の讚歎供養正行は信仰が確立してから後に自然に起る行爲で

「讚むべき哉、如來廣大の御慈悲よ」

と云ふ氣持と共に、香華燈明や食物は勿論のこと、場合に依ては此身も心も捧げんものとの氣持さへ起るに至るものである。

だから此五種の行爲も、最初の二つは全くの助業に過ぎなく、第三と第五とは第四の念佛行に自ら含まるゝもので、強いて云へば「正助業」とも云ふべきものであらう。

いづれにしてもそれらが信仰を高め信仰を進ましむるものならよいのである。要は私達の本心の納得される信仰を獲るにある。そしてそれを培養し増進して信仰を深めて行くことにある。

色々の理窟をこねて見たり、見佛三昧を得なければ本當の確信でないなどと云つた

(七)學者のこと

りしたのでは、萬人にも通ぜず、自分ではからひをこしらへること、むしろ如來の大慈悲を小さく見るものである。

法然上人は云つて居られる。

「學生、骨になりて念佛や失なはんずらん」と。

「唯だ信じて申す」ことこそ本當のものである。

然し、それかと云つて、何も自然に與へられる「見佛」等の現益を否定すること、

いらぬ詮議立てである。

重ねて云ふ。

信仰の培養になるものなら、多々ますます辨ずるものであることを。(第二回終り)

前號「一枚起請文」講義正誤表

(七三頁九行)	聖閣	誤
(〃〃)	聖聰	
(〃〃)	上人	
(〃十行)	開書	
(〃〃)	法洲	
(七三頁一行)	學解	
(〃四行)	黒谷金戒	
(〃九行)	勝尾寺	
(〃十行)	頼に降る	

正	聖閣	聖聰	上人(以下之に)	開書	法洲	學解	黒谷金戒	勝尾寺	頼に降る
---	----	----	----------	----	----	----	------	-----	------

(〃十一行)	建歴	建歴
(〃十二行)	給仕	給仕
(七四頁一行)	懇請	懇請
(〃二行)	「浄土随聞記」	「浄土随聞記」
(〃四行)	稱するものは	稱するものは
(〃八行)	候はず	候はず
(〃十五行)	存ぜず	存ぜず
(七五頁三行)	の給はる	の給はく
(〃〃)	智者達	智者達
(〃六行)	三心	三心
(〃八行)	決定	決定

(七七頁八行)	起らした	起した
(七八頁七行)	求道	求道(以下之に)
(〃十行)	法然	法然
(七九頁一行)	四修	四修
(〃〃)	長時修	長時修
(〃二行)	極樂へ今より	極樂へつとめて
(〃三行)	乗りつきなん	乗りつきなん
(〃七行)	度せん	度せん(以下)
(〃〃)	生に向かつてか	生に於てか
(〃八行)	法照	法照
(〃九行)	於ける	對する
(〃十二行)	御遺誠	御遺誠(以下)

法然上人鑽仰會

の其の後の經過

相次ぐ支部の設置

「淨土」の月極め購讀者が五名以上出來た地方では支部を作れる規定になつてゐて、支部は「淨土」購讀者の他に、講演會や座談會や研究會など色々な事業ができることになつてゐるので、陸續として支部設置の報告が各地から舞ひ込んでくる。既に七十二の支部が設置された。少ない所で五六名、多いのになると鹿兒島支部、朝鮮釜山支部、同大田支部、静岡縣焼津支部の各百名。二十名三十名の所はザラにある。月極め購讀者は誌代年額壹圓で「淨土」の他に月刊新聞「法然鑽仰」が配布され、その上色々な特典を得られるからなるべく早く各地に支部を作つて戴きたい。

歴史的盛觀！ 本會發會式。

約半歳の多忙な準備時期を経て諸般の準備全く完了して、機縁も圓熟したので、遂に四月十二日正午から京都知恩院山内華頂會館に於いて發會式を舉行した。その前夜、中部日本から九州へかけての代表的な人達四十餘氏の參集を煩はして、會の事業、將來に就いて腹藏なき意見を求めて、それぞれにこの聖業の健やかに成育するやう協力するといふ支持を得て、會の前途は愈々洋洋たるを思はせた。十二日は櫻の期節にあり勝ちな數日來の曇り勝ち降り勝ちな天氣もすつかり拭はれて、東山一帯の櫻も新緑も、鴨河原の柳の芽も、一段と春光に映えてゐた。參集せる全國の代表實に八百、老若婦素、色取り取りである。佛教專門學校學生三百五十の他に、諸他の學生の參加を加へると優に一千を超えてゐる。代表には北は樺太、北海道から、南は鹿兒島、遙かに朝鮮、滿洲から參加した人さへある。かくて、この多數の感銘の中に法然上人鑽仰會發會式は舉げ

られた。このやうな歴史的景觀が會であつたであらうか。その總べての報告は遺憾乍ら月刊新聞「法然鑽仰」に譲る。

祖廟前の結盟宣誓式

發會式が終ると、法然上人廟前の宣誓式がこれに續いた。會場を出た一千の大衆は誰言ふとなく、自四列縱隊を作つて、靜々と進む。黒門から廟前の急坂へと進む大行進は蜿蜒長蛇の列である。口々に高聲に唱和する大念佛は、華頂全山を揺がすかとも思へる。大衆は祖廟を十重八十重に圍んだ。勿論餘り廣くない廟所の事であるから、大半は遙かに下の廣地でこの盛儀、仰いでゐる。一會の回顧の後嚴かに讀まれた結盟宣誓文のさ中には、どこからともなく歎歎の聲さへ聞へてきたのである。(佐藤)

文學博士 矢吹慶輝著
金孝敬 朝鮮語譯

定價 九十錢 送料 六錢

東京市芝區芝公園明照會館内

「覺聖法然」刊行會

編輯後記

▽創刊號は發賣旬日ならずして賣切れ、増刷と云ふ好成绩で、本部は歡呼の聲を擧げた。讃辭と批判の雨が編輯室に降りそそいだ。それ等を一つ／＼掲載出來ぬのが残念だ、我等は、それ等を確りさぐりの糸にして今後益々確實な前進を續けて行く決心だ。こゝで一括して感謝の辭をのべます。(賀)

▽本月號は、大本山増上寺法主大島徹水師の興味と含蓄ある法話、宗教學界の泰斗、矢吹慶輝博士の論說、日本一のお天氣博士藤原咲平先生の信仰體驗等、いづれも御繁忙の中を特に本誌のために執筆下されたもので、本誌以外には見られない獨特の光彩をそへたもの。心してお読み下さい。

▽佐藤春夫氏の「源空上人傳」は一流の麗筆を以て、法然上人の御生涯の繪巻きが、今後數回に亘つて繰りひろげられて行く筈です。井上正春氏の挿繪と共に御愛讀下さい。

前山好評を博した十一谷義三郎氏の「往生繪卷」は本誌にも繼續する豫定で、さしあまで出來上つたが、執筆者の御都合で遂ひにメ切に間に合はず、次號に譲りました。必ず讀者の目を奪ふやうなものになるであります。御期待を乞ふ。

▽中村辨康氏の「一枚起請文講義」非常な感激で迎へられ、本誌よりいよく本筋に入りました。是非とも讀んで置かねばならぬ、信仰指導の大文字であります。

▽その他、どの部分をとつて見ても、その優れた内容を誇ることが出來ます。この小冊子でこれだけの内容あるものは絶対にないといつてよい。値段の安いのに驚く前に内容の價値に驚いて頂き度い。今後とも、更にこの緊張を續けて、讀者に報ゆるあらんことを我々は期してゐます。(校正室にて道)

創刊號の反響は素晴らしい。編輯室は勇氣百倍、この熱と力をもつて號をおつて充實させてゆく。堅實な歩みを見て欲しい。讀者に充分むくゆることが出來ると思ふ——。(一)

淨 土 六 月 號

昭和十年五月廿日印刷納本
昭和十年六月一日發行

(定價 金十錢)

品川區南品川四丁目三七八
編輯兼 佐藤 賢順
發行人

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人鑽仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨 土」購讀規定

一部 定價 金十錢 (送料二錢)

半年 金六十錢

法然上人鑽仰會員の一ヶ年分の會費一圓中には、月刊新聞「法然鑽仰」(月一回發行)と「淨土」一ヶ年分の誌代及び送料が含まれてゐます。

徳本行者

中野善英氏著

四六版上製
八十餘頁
總ルビ付
定價廿錢
送料二錢

何ものにもたじろがず、ゆるがず、直往邁進する莊嚴な信仰の姿！ これこそ狐疑し逡巡し勝ちな現代人の日常生活に一つの光明を指示するものだ。

驚くべき肉體と精神との苦行を通じて開かれた行者の言動の一つ／＼が讀者の迷ひを開いて行く、加之著者の懇切で含蓄ある説明は最も良き信仰指南である。



中村辨康氏著

四六版 七十六頁 總ルビ付

定價 廿錢 送料 二錢

信仰とは？ 佛教とは？ 徒らに言葉を弄する勿れ、信仰を玩ぶ勿れ！ 簡潔に、明朗に、しかも懇切に書かれた本書は、繁雜をさけて眞一文字に正しい信仰への道を開いて見せる！ 再讀、三讀！ いよ／＼日常生活の光明となる。

近刊豫告

藤本了泰氏著

江戸と増上寺

第三輯

石井教道氏著

聖問上人

第四輯

佐藤賢順氏著

行誠上人

第五輯

定價は發行の都度發表します。

大衆的信仰雜誌の隨一

淨き園 一部二錢 一年卅錢

増上寺出版部

東京市芝區芝公園
振替東京一五四五四
電、芝43四四五・四四六

銀
ブ
ラ
に
は
ぜ
ひ

當店へおたちよりを……

階上
高級

佛蘭西料理



御註文は迅速に

お届け致します

洋菓子

モナ

銀座

電話銀座4859

電話銀座4415

日英米專賣特許

オゴン蓄音器



▼新發賣▲

浄土宗歌謡集レコード

オーゴンレコード會社謹製

A面 全浄土宗青年會聯盟の歌

里見達雄作詞
山田耕作作曲

B面 月

法然上人御歌
弘田龍太郎曲

影

一枚 定價 一圓二十錢
送料 二十二錢

兒童用レコード (近日發賣の豫定)

第一回 明照こども踊り 明照兒童行進曲

高井ひさ子



D-1型
MODEL
D-1 ¥40.00



P-7型
MODEL
P-7 ¥25.00

製造發賣元 洋々社 京橋區木挽町三ノ二

寺大成・路鉤・贈寄

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年五月廿日印刷納本
昭和十年六月一日發行

浄土 六月第二號

定價金十錢(送料一錢)